Study Series No. 37 *October 1996*

労働者クラブにおけるイヴェントと人間関係
——1890年代のロンドンを中心に——

小　関　　隆

一橋大学社会科学古典資料センター
Center for Historical Social Science Literature
Hitotsubashi University

はじめに

イギリスのクラブといえば、ジェントルマンたちが政治を語り、カードを楽しむそれ、地理的にはペル・メルあたりに位置するそれを、誰しも想起するだろう。イギリス的ないしイングランド的な人間の結合関係の注目すべき形態としてクラブがとりあげられることも多いが(clubbable Englishmen)、こうした際に事例にされるのもほぼ例外なくカールトン・クラブやリフォーム・クラブに代表されるような排他的なエリート・クラブである。しかし、本稿が対象とするのは、19世紀末の労働者たちが享受していたクラブ・ライフである。イギリスでは、ジェントルマンのみならず、民衆の間にも、クラブを形成する長い伝統があった。すでに18世紀から、例えば、職種の諸問題の討論やゲーム等での懇親を目的に職人たちがクラブを結成することは珍しくなかったし、クラブをはじめとする民衆の「コンビネイション」がしばしば弾圧されたフランス革命期以降も、民衆的なクラブの伝統が根絶されることはなく、社会運動史上では少なからぬクラブが重要な役割を果たした。本稿でとりあげる労働者クラブの運動は、1862年の労働者クラブ・インスティテュート同盟(Working Men's Club and Institute Union 以下CIU、労働者クラブの中央組織)の結成を直接のきっかけとして展開された。しかし、その背景にはジェントルマンのクラブにも劣らぬ豊かな伝統が存在したのである。[1)]

本稿の課題は、労働者クラブで取り組まれた様々なイヴェントの検討を通じて、労働者たちにとってクラブとはいかなる場であったか、クラブメン相互の人間関係はどのようなものであったか、を考察することである。主たる素材として1890年代のマイルドメイ・ラディカル・クラブ(所在地はロンドン北部のイズリントン、ニューイントン・グリーン34番地)がとりあげられるのは、多分に偶然の積み重ねによる。ロンドンでも主導的なクラブだったマイルドメイについては新聞等の史料が比較的整っていること、1895年の新しいクラブ・ハウスの建設が興味深い考察の手がかりになること、あるいは、筆者自身がクラブを訪問し(1995年8月)、1898-1900年の時期の委員会議事録の存在を確認していること、等。マイルドメイは「イングランドの労働者クラブの中でも最大規模かつ最高のものの1つ」とまで評されることのあった存在であり、クラブの「典型」や「平均」を体現したものとみなしうるわけではない。[2)]

あらかじめ1890年代という時期をクラブ運動史の中で簡単に位置づけておく。拙稿「ヘンリ・ソリと労働者クラブ構想」で述べたように、CIU結成当初のクラブのほとんどは、「道徳的堕落」の状態にある労働者の「エレヴェイション」を目的に、彼らに「合理的レクリエイション」の場を与えんとして、富裕なパトロンによって設立されたものであった。この時期のクラブでは、コンサート、スポーツといった娯楽的な活動と並んで、クラスやレクチャーのような教育的な活動も精力的に取り組まれた。また、メンバーになる労働者の自治を運営の原則としながらも、パトロンによる「上からの指導・援助」が制度化されていることが多く、大抵のクラブは、アルコールの排除、党派的・宗派的行動の排除、等の原則に従っていた。クラブがこうしたパタナリズムから脱却していくきっかけになったのが、アルコールの導入であった。クラブメンからの強い要求に応じて、1860年代半ば

頃から、段々と飲酒を容認するクラブが増えていったわけだが、アルコール導入の動きは様々な問題に連動した。労働者の「エレヴェイション」と飲酒を両立しがたいものとみなすパトロンは多く、彼らは徐々にクラブ運動への熱意を喪失していく。逆に、アルコールの販売を通じて、クラブはパトロンの援助に依存しない自立的な財政基盤を得る。そして、パトロンのクラブ運営への介入に対する反発が強まり、1870年代頃から、独自のクラブを設立したり、パトロンと絶縁したりといったかたちで、多くのクラブが文字通り「労働者の組織」になっていった。こうしたクラブの自立化はクラブと政治の関係にも変化を及ぼし、少なからぬクラブが政治的な活動にもコミットするようになるが、1880年代以降には、ほとんどのクラブは娯楽的な活動にはっきりと重点を移行させる。本稿が扱う1890年代は、「教育の場」でも「政治の場」でもなく、何よりも「娯楽の場」としてのクラブの性格が定着し、さらに強まっていく時期にあたる。そして、1890年代のクラブ・ライフの基本的な特徴は、その後も長く維持されることになる。[3)]

19世紀後半におけるこうしたクラブの変容、とりわけクラブが娯楽へと傾いていくプロセスは、例えば労働者階級の「リメイキング」に関するギャレス・ステッドマン・ジョウンズのそれのような、より大きな歴史的議論にかかわってくる。1870年から1900年にかけての時期のロンドンにおいて新しい労働者階級文化が成立したことを論じる中で、ステッドマン・ジョウンズはクラブをとりあげ、階級文化の変容をシンボライズする役割を与えている。

> 労働者クラブは、1870年代、1880年代には職人急進主義の中心であった。しかし、1890年代初頭頃から、急進的なクラブメンが政治への関心の衰退を指摘するようになる。代わって、ますます増大するエンタテインメントへの要求が台頭した。アマチュア芝居、ダンス、歌唱といったかたちのエンタテインメントは、以前から常に労働者クラブのウィークリ・ルーティンの不可欠の部分であった。レクチャーや政治的ディベイト、デモンストレイションがクラブの活動の中で支配的な位置を占めていた1880年代半ばにおいてさえ、そうであった。しかし、1890年代になると ... クラブ・ライフの政治的・教育的な側面は弱まっていった。エンタテインメントが支配的なアトラクションとなり、クラブ内の力関係はポリティカル・カウンシルからエンタテインメント・コミッティに傾いていく。... 早くも1891年には、政治的な「レクチャーでは、それがどんなに聡明なものであっても、多くの聴衆を集めるのは難しいこと、逆に、どんなに本当の力量を欠いていようとも、コミック・シンガーや寸劇芸人ならいつでもホールを満杯にできること」が認識されていた。さらに、クラブで台頭していたのは常に最も軽い種類のエンタテインメントだった。かつては、シェイクスピアの芝居やバラッド・シンギングが社交の夕べの人気演目だった。今や、ミュージック・ホール・エンタテインメントこそが要求されるすべてとなった。[4)]

本稿が課題とするクラブ・ライフの検討は、この時期の労働者の特質を考えるにあたっても、重要

な手がかりを提供することになろう。

註

(1) Laurence Marlow, 'The Working Men's Club Movement, 1862–1912: A Study of the Evolution of a Working Class Institution', Ph. D. thesis, Univ. of Warwick, 1980, chap. 1; W. Fraser Rae, 'Political Clubs and Party Organization', *Nineteenth Century*, vol.3, May 1878; W. Pett Ridge, 'Club Life in East London', *National Review*, vol. XVIII, no. 103, Sept. 1891; E.P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, London, 1963, rpt. 1982, chap. 15. 労働者クラブについての現時点で最も包括的な研究であるローレンス・マーロウの博士論文は、イングランド人の「クラバビリティ」を国制的自由の伝統に関連づけて説明している。

(2) Minute Book of the Committee, Mildmay Radical Club, 17 May 1898–6 Feb. 1900, kept at the Club; *Club Life*, 7 Jan. 1899.

(3) 労働者クラブ運動史の大まかな流れを把握するためには、さしあたり以下を参照。John Taylor, *From Self-help to Glamour: The Working Man's Club, 1860–1972*, Oxford, 1973; George Tremlett, *Clubmen: History of the Working Men's Club and Institute Union*, London, 1987; Marlow, *op. cit.*; 拙稿「ヘンリ・ソリと労働者クラブ構想:『合理的レクリエイション』の試み」『東京農工大学一般教育部紀要』31巻、1995年3月。

(4) Gareth Stedman Jones, 'Working-Class Culture and Working-Class Politics in London, 1870–1900: Notes on the Remaking of a Working Class', *Languages of Class: Studies in English Working Class History, 1832–1982*, Cambridge, 1983, pp. 209–10. ステッドマン・ジョウンズの「リメイキング」論文を震源とする論争に対し、労働者クラブの研究はいかなる一石を投じることになるか、については、改めて別の機会にとりあげたい。

第1節　クラブの1週間

まず、1894–98年の時期のマイルドメイ・クラブの週スケジュールを把握することから始めよう。[1] 基本的には仕事を持つ労働者の組織であるクラブが何らかのイヴェントを設定できるのは夜間、例外は土曜午後と日曜全日ということになる。各々の曜日にいかなるイヴェントが設定されていたか、その傾向を順に見てみる。

土曜:　イヴェントは夜に組まれることが多い。圧倒的に多く企画されているのはヴァラエティ・ショウ。

日曜:　午前(11:30ないし12:00開始が多い)と午後(20:30開始が多い)に大別されてイヴェントが組まれる。午前については、ヴァラエティも多いが、それ以上にコンサート、特にクラブ・バ

ンドによるそれが多いのが特徴的。午後もヴァラエティが強いが、相対的に芝居が多い点が注目される。午前・午後とも土曜のヴァラエティほど支配的なイヴェントはない。ただし、いずれも娯楽イヴェントであり、教育的なそれはほとんどない。夕方にはイヴェントが少なく、各々のメンバーが自由にすごす時間とみなされていたと思われる。

月曜：　芝居の比重が最も大きいのが月曜の特徴。つづいて、ヴァラエティ、コンサート。

火曜：　この日の人気はシンデレラ・ダンス(午前0時に終了する小規模なダンス・パーティ)。それ以外にもボール(舞踏会のことだが、さほどフォーマルなものをイメージする必要はない)、ダンシング・クラス、等、ダンス絡みのイヴェントが多い。

水曜：　レクチャーはこの日に集中する。次に多いのが会合であるから、水曜は「シリアス」なイヴェントの日だったようである。

木曜：　クラブの月例会合はおそらく第一木曜に定例化されている。その他はいろいろなイヴェントにばらつく。ベネフィット目的のイヴェントやアスレティックが相対的には強いが、曜日の性格をはっきり刻印するほどではない。

金曜：　ほぼ完全にアスレティック・クラスの活動のみ。

マイルドメイの1週間の流れを確認してみよう。労働者が最もリラックスできる時間、気分的にも財政的にも余裕を感じることのできる時間は、まず間違いなくウィークエンドだろう。エリック・ホブズボウムによれば、かつては土曜に支払われていた週の賃金が金曜に渡され、ウィークエンド、特に土曜がレジャー活動の主要な機会になるような労働者の1週間のパターンが定着するのは、1870年代のことである。本稿がとりあげる時代のクラブにとっても、ウィークエンドがいわば「ゴールデン・タイム」であったことは、容易に想像できる。したがって、ウィークエンドに最も人気のあるイヴェントが充てられるのは当然だろう。実際、ウィークエンドについては、設定されるイヴェントの種類があまり変動していない。ヴァラエティ、コンサート、芝居といったイヴェントへの要求は安定して強かったと考えられる。ただし、ヴァラエティが一貫して強い中でも、土曜はヴァラエティ、日曜午前はコンサート、日曜午後は芝居に相対的な傾きが見られる。こうしたパターンは何よりも慣習的に定着してきたものと思われるが、それ以外にも、例えば「コンサートは朝、芝居は夜」が多くの人々にとって自然であり、その逆には抵抗を感じる者が少なくない、といったある種の文化的コードの存在を想定すべきかもしれない。また、教会のサーヴィスと最もはっきりと競合する時間帯は日曜午前であるから、後述するように「ピューリタン的」な立場から激しい攻撃を受けがちであった芝居やダンスではなく、比較的風当たりの弱いコンサートをこの時間帯に設定しようという配慮も推測できる。1週間の労働を終えたクラブメンは、まずは気軽なヴァラエティで土曜の夜をすごし、日曜は昼前くらいからクラブに集まってクラブ・バンドの演奏に耳を傾け、午後の時間を友人たちとの会話やゲームで楽しんだ後、夜には芝居やヴァラエティによって明日への英気を養ったのであろう(ただし、1人のメンバーが必ずしもすべてのイヴェントに律儀に

参加したわけではないことに留意が必要)。なお、日曜の活動にはサバタリアニズムの立場からの反対の議論が存在し、CIU を題材とした博士論文を書いている T.G. アシュプラントによれば、1889年の時点でロンドンのクラブの約19%が日曜にはクローズされていた。マイルドメイは反サバタリアニズムの姿勢をとっていたことになる。[2)]

月曜・火曜は、イヴェントの開催頻度についてはウィークエンドとほとんど変わらない。それでも、日中は原則として仕事をしているわけであるから、ウィークエンドほど大勢がクラブへ集まってきたとは思われない。そのうえで、月曜は芝居、火曜はダンスといったはっきりとした傾向が見られる。

水曜・木曜になると、随分イヴェントの数が減ってくる。水曜には「シリアス」な、動員力の点では期待できないイヴェントが多い。かつてはクラブの中心的な活動の1つであり、それなりに「いい時間帯」をもらっていたレクチャー等が、水曜に追いやられてしまった印象が強い。木曜には、他の曜日に組み込まれないベネフィットのようなイヴェントが振り充てられている。メンバーにとっても、週の真ん中、最もクラブから足が遠退く2日なのではなかろうか？　金曜はウィークエンドへの準備日とみなしうるかもしれない。

勿論、1つのパターンがいつまでも踏襲されていくわけではない。例えば、1891年の時点では、ダンスは月曜、アスレティック・クラスは火曜に開催されるのが通例だった。[3)] また、1899年になると、芝居は水曜に上演されることが多くなっているし、クラブの月例会合も金曜に開催日を移動させている。[4)] それでも、ウィークエンドのイヴェントに大きな変動は見られない。娯楽でウィークエンドを送ることは、1890年代のマイルドメイでは定着した慣例となっていたのである。

1899年7月22日（土）に始まる1週間のイヴェントを具体的に見てみよう。土曜夜には、ダンス（20:00～23:00）と並行して、20:30からヴァラエティ。日曜には、12:00からクラブのグラウンドでロンドン・ミュージシャンズ・ユニオンの50人から成るスペシャル・バンドが演奏（有料2ペンス)。夜は20:30からヴァラエティ。この週には芝居が2本企画されていて、月曜の20:30からウィルフレッド・フライズ・カンパニによるプロローグと3幕で構成されるオリジナル・ドラマ『イギリスの旗』(有料1ペニ)、水曜20:30からはハロルド・フィンドゥンズ・カンパニのファルス風コメディ『ケープへの旅』(料金の記述なし)。いずれもボーア戦争を想起させるタイトルである。火曜は恒例によって20:00からダンスの夜。木曜・金曜については記録がない。[5)]

もう1つ、1899年11月24日（金）に始まる1週間。金曜には恒例通りアスレティック・クラス。土曜夜はヴァラエティ。日曜午前にはクラブのオーケストラル・バンドが演奏を披露し、夜は再びヴァラエティ。「この日のヴァラエティは全体を通じて良質であった。ロバート・エムスリーが愛国的な歌を見事に歌い、我々は強く戦争熱にとらえられているため、拍手は盛大であった。フロウ・アンウィンのバラッドの歌は実に心地よいものだった。」ここにもボーア戦争の影がさしている。月曜には新機軸のイヴェント、映画上映つきコンサートが企画された。[6)]

ここで、マイルドメイ以外のクラブから得ることのできるデータを利用して、クラブの週スケ

ジュールについてもう少し一般的なイメージを描いておく。まず、1890-91年時点におけるロンドン及び近郊の42のクラブのデータから。[7]

土曜：　コンサートが圧倒的に多い。ベネフィットもかなり目につく。
日曜：　午前・午後ともにヴァラエティやコンサートが多いが、午前についてはレクチャーや朗読のような教育イヴェントも娯楽に劣らぬくらいの割合を占める。午後になると、教育が完全に姿を消すわけではないが、やはり娯楽が前面に出てくる。特に目立つのは芝居。
月曜：　ヴァラエティやコンサートが多いが、ダンスもかなり目につく。
火曜・水曜：　イヴェントの数がぐっと少なくなる。ただし、人の集まりにくい曜日だから「シリアス」なイヴェントに充てられる、という相関関係はなく、イヴェントそのものは娯楽がほとんど。
木曜・金曜：　いよいよイヴェントが減り、事実上「開店休業」状態になるケースが多い。

つづいて、1899年時点におけるロンドン及び近郊の27のクラブのデータから。[8]

土曜：　ヴァラエティやコンサートが圧倒的に多い。
日曜：　午前についてはコンサートが多いのが目立つ。レクチャーも残っている。午後で特徴的なのは芝居が多いこと。総じて、午前に比べると娯楽がより前面に出てくる。
月曜：　ダンスが多いことが特徴。コンサートや芝居も強い。
火曜：　芝居が多いことが特徴。
水曜：　イヴェントの数が減ってくるが、木曜・金曜ほどではない。特定のイヴェントに集中する傾向はなく、いろいろに分散する。
木曜・金曜：　イヴェントそのものがきわめて少ない。

「イースト・エンド最大のクラブ」と呼ばれるベスナル・グリーン近くのユナイテッド・ラディカル・クラブの1891年頃のウィークエンドの様子について、以下のような叙述が残っている。

ケイ・ストリートのクラブが最もにぎやかになるのは土曜と日曜である。スウィング・ドアを通って、次々にメンバーがやってくる。友人(彼らのためには1ペニのティケットが購入できる)を連れている者もあれば、妻や恋人(彼女らのためにはマンスリ・ティケットが購入できる)を連れている者もある。階上のホールへ向かう者もいれば、階下のバーに入っていく者もいる。このバーはびっくりするくらい大きい。... バーの近くには小さなブッキング・オフィスがあって、忙しい夜には興奮した者たちがティケットを手に入れようと、ピジョン・ホールの反対側にいる物静かな男に、「1枚」「2枚」「4枚」等と叫んでいる。この物静かな男は、硬貨と

引き換えに、いくら支払われたかに応じた数字の記載されているティケットを発行する。こうしたティケットを持ってはじめて、メンバーはバーに入って好みの酒を入手できるのである。グラス1杯のビールが1ペニ、エイルやスタウトが1杯1.5ペンス、ウィスキーやジンが1杯2ペンスである。反対側の壁のあたりにはビリヤードやバガテルのテーブルがいくつかあり、どれも使われている。彼らのまわりには、熱心にプレイを見ている批評家のグループが立っている。階上にはホールがある。およそ800人が収容可能である。... コンサート・ナイトのプログラムの大部分はコミックと呼ばれる歌から成る。パフォーマンスはマイナーなミュージック・ホールような線で行なわれる。... プログラムが終了するのは11時30分頃である。... 日曜のプログラムは通常次のようである。午前10時30分にクラブがオープンし、午後3時にいったんクローズ。午後6時に再びオープンし、午前0時にクローズ。ホールでは午前11時30分からコンサートが、午後9時からヴァラエティ・エンタテインメントが開催される。[9)]

マイルドメイのそれと合わせて、クラブの活動を貫く1週間のパターンをある程度まで抽出することができる。ヴァラエティやコンサートが支配的な土曜。日曜では、コンサートが朝に、芝居が夜に設定される傾向がある。おそらく、当時の文化的な「常識」においては「音楽は朝、ドラマは夜」が自然だったのであろう。また、午前には午後よりも教育イヴェントが入り込む余地が大きい。同じ日曜でも、午後は土曜と並んで動員が最も容易な時間帯であり、人気のあるイヴェントが支配的だったが、土曜夜に娯楽を楽しんだ直後の午前の方は、やや「地味な時間帯」とされていたように思われる。また、ダンス絡みのイヴェントは、連日つづくようなやり方ではなく、週1回くらいに集中して取り組まれるのが普通だった。そして、ウィークエンドを控えた木曜や金曜はあまり大騒ぎせず、淡々とすごすべき日だったのであろう。

また、マイルドメイのスケジュールからも他のクラブのそれからも、1890年代を通じてクラブの娯楽志向がいよいよ強まっていった事実を見てとることができる。マイルドメイにおいて「シリアス」なイヴェントに充てられることが慣例になっていたと思われる水曜は、1899年には芝居の日としての性格を強めている。週に1日なんとか確保されていた「シリアス」な曜日も、徐々に娯楽に飲み込まれていったのである。その他のクラブの事例をあわせて考えても、1890-91年の段階ではレクチャーは日曜(主として午前だが、夜もある)のきわめてよくある企画だった。「いい時間帯」を与えられるくらいには人気があったわけである。ところが、1899年になると、クラブの世界で堅固な位置を占めていたはずのレクチャーは、すっかり影を薄くしてしまっている。[10)] 個々のクラブにおける娯楽イヴェントと「シリアス」なイヴェントの競合は総じて前者が「いい時間帯」を獲得するかたちで展開し、こうした事情は、娯楽イヴェントを充実させたクラブがそうでないクラブを動員力やメンバー数において圧倒する、というように、クラブ相互の争いにも連動した。

週スケジュールの中でいわば定番になっている4つのイヴェント、すなわち、ヴァラエティ、芝居、コンサート、ダンス、について、簡単に述べておく。まず、この時期、最も頻繁に企画されたと

思われるヴァラエティの具体例を1つ提示しておこう。1891年1月11日（日）午前にセントラル・フィンズベリ・ラディカル・クラブで開催されたもの。トム・ティーによるピアノ演奏、クラブの副会長マンデイによるバーンズの詩の朗読、ジョン・ベドフォード・リーノらによるストーリの朗読、リチャード・ガストンによる講演。[11] ヴァラエティの最大の特徴は、音楽的・口承的・演劇的要素のコンビネイションである。しかし、「ヴァラエティ」の名の通り、コンビネイションのあり方は事実上無制限であり、すべての要素が常に出揃うということでもない。

ヴァラエティがクラブで頻繁に企画されるようになると、クラブとミュージック・ホールの間では活発に人材が交流した。無名・不遇時代をクラブのステージでの「修業」に費やし、才能を開花させたうえでミュージック・ホールに進出するのが通常のパターンだった(逆もあったが)。ミュージック・ホールを主たる活躍の場としていた役者ブランズビ・ウィリアムズは、「カーペットもない」ような環境ながら、「役者をその気にさせる観客」に恵まれたクラブでの「下積み」時代について、叙述を残している。役者としてのデビューは、次のように回顧される。

> 本当の役者として私が舞台に初めて登場したのは、思うに、以下のような顛末においてだった。『ステージ』に、次のような広告が掲載された:「求む、アマチュア役者」。私はこれに応募し、契約した。私に与えられたのは、『誰にもちょっとした欠点はある』というファルスの「ジンジャーナッツ」なる役だった。私はすぐに台詞を覚え、それから、役柄に扮するための白いジャケットとパン屋の帽子を奔走して手に入れた。自信満々に言うことができるが、一言たりとも聞き逃さないように、何一つ見逃さないように、集中力をもってすべてのリハーサルに参加した。アドレスを教えてもらっていたので、パフォーマンスが行なわれる「労働者クラブ」に私は充分余裕をもって到着した。両親にはすべて内緒だった。クラブというものを見たのもこれが最初だった。... おがくずの敷かれた舞台のある大きなホールで、古いミュージック・ホールのように、シートとテーブルが置かれていた。... 私はこの日のことを決して忘れないだろう。これ以上ないほどに緊張していたのである。... しかし、私は無事に最後まで演じきり、観客にも喜んでもらったと思う。この日のパフォーマンスが、それから数年間にわたる労働者クラブや類似のインスティテュートでの芝居の始まりとなった。私は一番の下っ端からスタートし、徐々に重宝な劇団のメンバーになっていったと思う。気がついたら、私には絶えず出演の声がかかっていた。

こうして、ウィリアムズはクラブをサーキットする劇団の常連役者になったのである。クラブ時代は「大変な闘い」の日々であったが、同時に、役者の訓練として実に有益な「輝かしい日々」でもあった。やがてクラブの人気役者となったウィリアムズは、ここで得た知名度を力に自分の劇団を持つに至り、クラブの外へと活躍の場を広げていく。[12]

ヴァラエティの重要な構成要素であり、単独で企画されることも多かった芝居に対しては、いわ

ば「ピューリタン的」な立場からの批判の伝統があった。ヴィクトリア時代にも根強い影響力を行使したこの種の批判は、芝居にかかわる様々な側面を問題にする。すなわち、芝居の内容が「通俗的」であったり「反社会的」であったりすること、役者には「いかがわしい」者が多いこと、演技行為が「偽装」や「変装」に近いこと、芝居に入り浸ると日常生活が破壊されてしまうこと、等。しかし、 芝居が労働者の間で人気を誇っていることは否定しがたかったため、 労働者の「エレヴェイション」 を志向する者たちの中には、 芝居を上手に利用すべきであると主張する者も増えていた。芝居は「労働者の嗜好をよりよいものとし、教育を授ける方法」として有効である、という認識である。クラブ運動の初期にはクラブにおける芝居を禁止した事例もあり、例えば、CIU の初代書記ヘンリ・ソリも当初は芝居を排除すべきであると論じていたが、ここまでの概観からも明らかなように、やがて芝居はクラブの活動の中核に位置するようになっていった。「ピューリタン的」潮流は総じて撤退を余儀なくされたのである。[13)]

クラブでは多様な芝居が上演された。前述のウィリアムズは、とあるクラブにおける『ハムレット』の上演について、次のように書き残している。「ステージと装置を持っているある大きなクラブにおいて、日曜の夜、今では有名になっている多くの役者によって『ハムレット』が上演された時には、私も参加していた。この夜には、ミス・エレン・テリが光栄にも最前列に座っていて、彼女の娘がオフィーリアを演じるのを観ていた。チェアマンはパイプを吸っていて、ハンマーを叩き、声を発してショウをスタートさせた。『お静かに、アムレットが始まります。』」[14)] こうしたいわば本格的な芝居と並んで、寸劇やファルス(自作を含む)、既成芝居からの有名な場面の抜粋といった、より「軽い」スタイルのものが上演されていたことも間違いない。1890 年代になると、後者の優位が全般的な傾向だったように思われる。1895 年 10 月の時点で、前述のガストンは以下のように述べている。「演劇娯楽を愛好する者は、芝居の大家たちの作品が消え去り、『愉快な娘』だの『ジェントルマン・ジョウ』 だのばかりが上演されている現状に ... 残念な思いをしているだろう」。[15)] 「軽い」イヴェントの優位は、芝居についても否定しえなかった。

クラブで芝居を上演したのはどんな者たちだったか？ 1894 年 10 月から 1898 年 11 月までにマイルドメイで芝居を上演した劇団として、以下の 11 の名称が把握できる。バイロン・バラーズ・カンパニ、ハロルド・フィンドゥンズ・カンパニ、ギャリック・コメディ・カンパニ、ホウボン・セスピアンズ・カンパニ、リリック・ミュージカル・コメディ・カンパニ、ホレイス・ノーマンズ・ドラマティック・カンパニ、オリンピアンズ・ドラマティック・カンパニ、G.T. レノルズ・ドラマティック・カンパニ、ロウヴァー・ドラマティック・カンパニ、スター・ドラマティック・カンパニ、J.H. ホワイツ・ドラマティック・カンパニ。これらの劇団の多くは、自分のクラブにおいて特定の作品を上演するために当該クラブのメンバーが集まってつくられたもので、しばしば「正しい英語を話す」「パブリック・スピーキングの能力を獲得する」といった目的を掲げたクラブ内の雄弁クラスが母体になっていた。言うまでもなくこの段階ではアマチュアである。ある作品が好評な場合には、近隣のクラブから上演を依頼される、といった事態が生じてくる。こうした成功

を積み重ねてはじめて、芝居にかかわっていたクラブメンはパーマネントな劇団の結成に踏み出す。これらのうちから、その後も人気を獲得できたものがプロの劇団になっていくわけである。とはいえ、たとえプロ化した劇団であっても、芝居だけで生計を立てていける者はきわめて少数で、個人のレヴェルで考えれば、クラブの芝居にかかわる者の圧倒的多数はアマチュアであった。[16)]

コンサートをはじめとする音楽的なイヴェントに対しては、芝居の場合のような強い批判の伝統はない。コンサートで音楽を聴くことについても、バンドや合唱団をつくって音楽を演奏することについても、あるいはもっとインフォーマルなかたちで音楽に触れることについても、それを「堕落」に結びつけるような議論の影響力は無視しうる。ヴィクトリア時代には、多くの者たちが、音楽には人間のモラリティを向上させ、調和的な社会をつくりだす力があるという、どこかロマンティックな認識を共有していた。例えば、ソリも、「音楽は... 我が民族の状態と性格を引き上げ、向上させるための強力な梃子である」と述べたことがある。それゆえ、クラブでは音楽的なイヴェントが当初から積極的に企画されたが、あらゆる種類の音楽が等しく価値を付与されていたかといえば、決してそうではない。「合理的レクリエイション」の理想を掲げていたクラブ運動初期の指導者の多くは、同じ音楽でも、「パブの歌」よりも「洗練」され「合理的」な「本当の音楽」をクラブで提供することを目指していた。 労働者の音楽的嗜好はそのまま無条件に承認されるものではなく、クラブにおける音楽的な経験を通じて「エレヴェイト」されるべきものだった。しかし、「合理的」とは呼べないタイプの音楽はクラブにおいて根強い人気を保っていた。シェイクスピアがファルスを駆逐できなかったのと同じく、「本当の音楽」 はコミック・ソングにとって代わることはできなかったのである。音楽的なイヴェントの主要な形態は間違いなくコンサートであり、プロのミュージシャンによるフォーマルなそれから、「フリー・アンド・イージ」に近いそれまで、コンサートと一口に言ってもその内容には相当の幅があったわけだが、 明らかに多数派を占めたのは、「ミュージック・ホール型」の雰囲気の中で行なわれるインフォーマルなそれだった。そして、クラブメンにとって、音楽的なイヴェントは単に鑑賞するだけの機会ではなく、音楽に参加する場でもあったし、クラブ・バンド(ブラス・バンドが圧倒的に多い)や合唱団を通じて自ら演奏することも、音楽にかかわる重要な活動だった。[17)]

クラブ・バンドに活躍の機会を与える主要なイヴェントであったダンスは、芝居と同様に厳しい批判の対象となった。すなわち、ダンスは華美や虚栄心、不道徳の温床になる、という議論である。ソリは言う。「ごくまれに行なうならば純粋に有益だが、頻繁に繰り返されると、あまりにも関心をひきすぎ、人を興奮させる傾向を持つために、はっきりと有害になってしまう娯楽はたくさんある。芝居やボールがそうである。... それはクラブの生命力やエネルギーをすべて吸収してしまいがちである。」しかし、本稿が問題にする1890年代に関する限り、もはやこうした批判が影響力を行使することはほぼなくなっているといえそうである。ダンスを「不道徳」とするような発想はクラブ運動の初期にはありえたが、運動の展開とともに多くの労働者をクラブにひきつけることの必要性が打ち出されてくると、生き残ることができなかったのである。それでも、ダンスは週に1回だけ、

といったある種の自主規制に、ダンスへの批判的な視線の名残を見出すことができるかもしれない。[18)]

註

(1) *Club World*, 3 , 17 , 24 Nov., 1, 8, 22 Dec. 1894, 2, 16 Feb., 3 Aug., 9 Nov., 14 Dec. 1895, 15 Feb., 14, 21 March, 18 April, 9 May, 27 June, 1 Aug., 3, 17, 31 Oct., 21 Nov., 12, 19 Dec. 1896, 2, 16 Jan., 6 Feb., 6 March, 3 April, 1 May, 5, 12 June, 3 July, 14 Aug., 4 Sept., 2 Oct., 6 Nov., 4 Dec. 1897, 8, 15, 22 Jan., 5, 12, 26 Feb., 5 March, 2 April, 7 May, 2 July, 6, 13 Aug., 1 Oct., 5, 19 Nov., 3 Dec. 1898.

(2) T.G. Ashplant, 'The Working Men' s Club and Institute Union and the Independent Labour Party: Working-Class Organisation, Politics and Culture, c. 1880–1914', D. Phil. thesis, Univ. of Sussex, 1983, p. 735; B.T. Hall, *Our Sixty Years: The Story of the Working Men's Club and Institute Union*, London, 1922, pp. 283–4; Eric Hobsbawn, 'The Formation of British Working-Class Culture', *Worlds of Labour: Further Studies in the History of Labour*, London, 1984, p. 186.

(3) *Club and Institute Journal*, 10, 17, 24, 31 Jan. 1891.

(4) *Club Life*, 4 March, 20 May, 22 July 1899.

(5) *Club Life*, 22 July 1899.

(6) *Club Life*, 2 Dec. 1899.

(7) *Club and Institute Journal*, 6 Sept. 1890, 3, 10, 17, 24, 31 Jan. 1891.

(8) *Club Life,* 7, 14, 21 Jan., 22 July, 4 Nov. 1899.

(9) Ridge, *op.cit.,* pp. 136–7.

(10) *Club and Institute Journal*, 6 Sept. 1890, 3, 10, 17, 24, 31 Jan. 1891; *Club Life,* 14 Jan., 4 Feb., 4 Nov. 1899; *Club World*, 23 Nov. 1895, 12 Dec. 1896, 10 Dec. 1898; *Workmen's Club Journal*, 22 May, 12, 26 June, 9, 16, 23 Oct., 27 Nov., 4, 11, 25 Dec. 1875; Harold Pollins, *A History of the Jewish Working Men's Club & Institute, 1874–1912,* Oxford, 1981, pp. 35–6; Marlow, *op. cit.,* p. 543; Taylor, *op. cit.,* pp. 60–1.

(11) ジョン・ベドフォード・リーノは、よく知られる自伝『アフタマス』(1892年)を残した印刷工。チャーティズムやインターにコミットし、詩人としても知られた。彼の詩はクラブメンの人気を集め、彼自身が朗読したばかりでなく、他のパフォーマーによって音楽をつけて歌われたりもした。「私はテナーのよい声を持ち、歌が得意で、これまでの経歴が明らかにしているように、物書きたちの言葉を解釈することができた。私の言い分が真実であることは、ロンドンの様々なクラブにおける朗読者としての私の評判からわかるだろう。... 私が常に自作の詩を読んできたことは事実である。しかし、それは他人の詩を読む能力がなかったためではない。今でも信じているのだが、私はきっと役者としても成功できたことだろう。」晩年、病気に苦しめられる日々を送っていたリーノのために、クラブメンは「ジョン・ベドフォード・リーノ・ファンド」を創設した。John Bedford Leno, *The Aftermath: with Autobiography of the Author*, London, 1892, rpt. New York, 1986, pp. 37–8; Stan Shipley, *Club Life and Socialism in Mid-Victorian London*, London, 1971, rpt. 1983,

p. 29; Taylor, *op. cit.,* p. 39. リチャード・ガストンも印刷工で、ボロウ・オヴ・ハックニ・クラブを拠点とした。いくつかのクラブにかかわる新聞を編集した他、役者・詩人としても活躍した。「非常に特徴的な性格と多様な能力を持った労働者、クラブの役者、朗読者であり、『クラブ・アンド・インスティテュート・ジャーナル』のエディターとして、おそらくは最初のクラブ・ジャーナリストでもある」と評される。CIU の発行する『クラブ・アンド・インスティテュート・ジャーナル』のエディターを 1888 年から 1894 年まで務めた後、本稿の重要な史料となっている新聞『クラブ・ワールド』及び『クラブ・ライフ』を、1894 年から CIU の援助を受けることなく発行した。1885 年 5 月にガストンが発表した以下の詩からは、強烈な労働者としてのプライドを読みとることができる。

我々労働者は嫉妬深い文士たちからしばしばひどい呼ばれ方をし、いろいろなジョークや嘲笑、冷酷なからかいの的にされる。

我々は「暴徒」であり「顔も洗わない連中」であり、時には「かす」や「くず」だったりする。まるで労働者によさを見出すことなど不可能だと考えられているようだ。しかし、我々は酒を飲むと同時にものも考える。我々は全く思考力のない人間ではないのだ。

アッパー・テンと同じくらいの(多分それ以上の)よいセンスを我々は持っている。私の言っていることが真実である証明がほしいのであれば、このクラブに来て、見てみればよい。このクラブをつくったのは彼らなのだ。

我々は金持ちにギニーを求めたことはないし、貴族にパトロネジを求めたこともない。我々は完全に自立的であり，何年にもわたってそうしてきた。

教会や学校を建てるために聖職者たちはしばしば物を乞う。しかし、「くず」も「かす」もクラブを自前でつくったのである。

我々の労働は厳しく、元気をなくしてしまったり憂鬱になってしまったりすることもしばしばだが、気力を失うことはない。どんなに始まりが慎ましくても、最後には成功できると感じている。

こうして今夜、我々は近くのクラブから、そして遠くのクラブから、友を歓迎する。我々がこのクラブで味わっている喜びを共有しようではないか。

Barry Burke & Ken Worpole, *Hackney Propaganda: Working Class Club Life and Politics in Hackney, 1870–1900,* London, 1980, pp. 17–9; Ashplant, *op. cit.,* pp. 96–103.

(12) *Club and Institute Journal,* 17 Jan. 1891; Bransby Williams, *An Actor's Story,* London, 1909, pp. 22–4, pp. 27–8; Ditto, *Bransby Williams by Himself*, London,1954, pp. 15–6, pp. 21–2, p. 181; Marlow, *op. cit.,* pp. 627–30.

(13) *Club World,* 28 July 1894, 26 Jan. 1895; Henry Solly, *Working Men's Social Clubs and Educational Institutes*, London, [1867], rpt. New York, 1904, pp. 142–4; Marlow, *op. cit.,* pp. 594–9, pp. 619–20; Taylor, *op. cit.,* p.37

(14) Williams, *An Actor's Story*, pp. 28–9.

(15) *Club World*, 26 Jan., 12 Oct. 1895; Ashplant, *op. cit.*, p. 243; Taylor, *op .cit.*, p. 62.

(16) Ashplant, *op. cit.*, p. 242; Burke & Worpole, *op. cit.*, p. 14, p. 26; Hall, *op. cit.*, p. 296; Marlow, *op. cit.*, pp. 624–7; Taylor, *op. cit.*, pp. 35–6, p. 64.

(17) *Working Man*, 9 June 1866; Working Men's Club and Institute Union, *Eighth Annual Report, 1869–70*, London, [1870], p. 12; Hugh Cunningham, *Leisure in the Industrial Revolution, c. 1780–1880*, London, 1980, pp. 102–4; Chris Waters, *British Socialists and the Politics of Popular Culture, 1884–1914*, Manchester, 1990, pp. 98–100; Burke & Worpole, *op. cit.*, p. 15; Marlow, *op.cit.*, pp. 599–600, pp. 612–5; Solly, *op. cit.*, pp. 149–52; Taylor, *op. cit.*, p. 32, p. 41, p. 67. 労働者の生活文化の中でブラス・バンドが占める位置については、次を参照。Brian Jackson, *Working Class Community: Some General Notions Raised by a Series of Studies in Northern England*, London, 1968(大石俊一訳『コミュニティ：イングランドのある町の生活』晶文社. 1984年), chap. 2.

(18) *Working Man*, 5 May 1866; Hagley Working-Men's Club, *Second Report*, London, 1856, pp. 4–5; Marlow, *op. cit.*, pp. 601–2; Taylor, *op. cit.*, p. 42; 前掲拙稿 pp. 26–7。

第2節　週スケジュールの外のイヴェント

毎週のスケジュールに組み込まれたイヴェントに加え、クラブには、こうしたスケジュールの外に設定される、通常より長い間隔をおいて、あるいはイレギュラーに取り組まれるイヴェントがある。再びマイルドメイを素材として、こうした活動について見てみよう。

まず、メンバー以外にも公開されたイヴェントから。クラブがメンバーを獲得していく際に特に重要だったのが、この種のイヴェントであろう。メンバーの友人を招待し、クラブ加入のきっかけをつくるために企画されたのが、インヴィテイション・パーティである。マイルドメイの場合、ルーティン・イヴェントが少ない木曜を利用してこうしたパーティを開催するのが通例だった。「クラブのノミネイション・ボードが立て込んでいるという事実が、この企画の効果を物語っている。現在、100名近くのメンバー候補たちが審査を待っているのである。」[1)]

しかし、ここまであからさまにメンバー獲得の意図を掲げた企画は、むしろ珍しかった。より頻繁に取り組まれた企画に、手頃な料金設定の食事会がある(シリング・サパー等と呼ばれたが、1シリングとは限らない)。こうした企画は通常さほどフォーマルなものではなく、食事の後には、参加者が歌や踊りを披露し合ったり、芸人が登場してコンサートを開いたりした。注目すべきは女性(多くの場合メンバーの妻や恋人)の参加であろう。「女性たちがやってきてくれるのは、喜ばしいことである。彼女たちこそが将来クラブ・ライフを救うだろうからである。いったん妻たちをクラブの味方にしてしまえば、長期にわたった無知に基づく偏見との闘いに我々は勝利することができるだろう。」1890年代ともなれば、女性を完全に排除するクラブは少なかったはずだが、それでも多く

のクラブが「男性中心の世界」だったことは間違いなく、食事会のようなイヴェントは、日頃からクラブに冷ややかな視線を向けていた女性たちにクラブを「理解」してもらうための重要な機会になったと思われる。[2)]

こうした食事会がベネフィットの目的を掲げることは珍しくなく、特に地域の貧しい子どもを対象にしたディナーは、マイルドメイではクリスマス・シーズンの恒例イヴェントになっていた。1896年12月26日に開催されたディナーについて見てみよう。ディナーに招待されるのは「近隣の貧しい子どもたち」だったが、クラブの施設上の限界のため、招待できるのは500人が精一杯だった。ディナーへの参加を望む子どもたちは多かったから、どうしても招待者の選抜が必要になる。「すべての近隣の学校から招待にふさわしいと思われる子どものリストが集められ、これにメンバー自身が知っている貧しい子どもたちが付け加えられた。こうしてできあがった数千のケースが委員会［クラブ内に設置されたディナーに責任を持つ委員会］に提出された。委員会はすべての子どもたちを訪問し、本当に欠乏している者だけが招待されるように努めた。」当日には、クラブのホールばかりでなく、委員会室や応接室、図書室も利用された。オールド・ストリートのレストラン「シャーリ」が用意したこの日の食事はロースト・ビーフとプラム・プディング、デザートにはリンゴが出た。食事が終わるとエンタテインメントが始まり、子どもたちも唱和した。すべてのプログラムが完了したのは午後5時頃で、子どもたちはオレンジと菓子、本を手土産に帰っていった。[3)]

1898年1月8日（土）の同様のディナーについての叙述。

> 土曜日にニューイントン・グリーンへ行くと、ディナーのニュースが広まったため、ティケットを持っていない大勢の子どもたちがマイルドメイ・クラブに向かおうとしていた。クラブのドアのところでは、開場時刻の1時間も前から、およそ300人ほどの少年や少女が待ちかねた様子で列をつくっていた。... クラブの中では多くの者たちが自発的に仕事をしていた。大ホール、委員会室、図書室がすべてテーブルを置いて準備されるので、彼らの労働は本当に必要であった。ウィルスン［クリーヴランド・ストリートのレストラン］とその従業員たちは蜂のように忙しくしていた。... ホールの真ん中にはきらきらしたランプのついた大きなクリスマス・トゥリーがあり、花が置かれたりデコレイションが施されたりしていた。開場されるとまもなくテーブルの席は一杯になった。ほどなく、ロースト・ビーフ、野菜、プディング、ミンス・パイが出された。それは最良の内容の食事で、誰にとっても充分な量があった。...
>
> ディナーの後、素晴らしいエンタテインメントが始まった。... これほど大勢の子どもたちがこんなに幸せそうにしている光景は、ほとんど見たことがなかった。彼らはコーラスや歌に唱和し、さかんに拍手をし、声をあげて喜びを表現していた。[4)]

子ども向けディナーを成功させるためには、様々なかたちの支援が不可欠であった。少なからぬク

ラブの関係者が会場の準備や給仕に駆り出されたし、「シャーリ」や「ウィルスン」といったレストランからは普段よりもはるかに有利な条件で食事が提供された。無償で出演してくれる芸人も多かった。クラブは日頃から「プア・チルドレンズ・ディナー・ファンド」を準備しており、例えば1898年1月8日のディナーにはファンドから50ポンドが充てられた。[5)]

マイルドメイでは、他にもいろいろなベネフィットのためのイヴェントが取り組まれた(政治的なそれについては後述)。食事会、ヴァラエティ、ボールといったかたちをとることがほとんどで、こうした場が財政的に困難な状態にあるクラブの職員やその家族(残された家族であることが多い)、近隣のクラブ、病院、等のためのファンド・レイジングに利用された。[6)] 1898年3月24日(木)には、クラブ内で盗難に遭ったバー・ステュアード、ウィル・ヴェナーを支援するためのヴァラエティが企画された。

> 木曜日の条件は決して恵まれたものではなかった。雪や霰が降る天候の下では、人々はクラブ・ベネフィットに出かけていくよりは、暖炉の近くにでも座っていたいと思うことだろう。しかし、この夜の惨めな天候は、参加者たちにさしたる影響を与えなかったようだ。この夜を通じて、大きなホールは大変よく埋まっていた。ウィル・ヴェナー氏は丁寧なマナーのバー・ステュアードとしてクラブのメンバーに大変に好かれており、彼が盗難で30ポンドを失ったと知って、メンバーたちは彼への同情の気持ちを実践的に表現すべく乗り出したのである。... コンサートにはクラブが誇る何人かの最高の芸人が登場したばかりでなく、ミュージック・ホールや劇場で活躍するプロの芸人も姿を見せた。... この夜の惨めな天候を考慮すれば、このイヴェントは成功したといってよかろう。[7)]

財政難に陥っていたバウ・リベラル・クラブを支援するためのソワレ及びコンサート(1894年11月28日水曜日)の際のように、マイルドメイは会場を提供するだけというケースもあった。とはいえ、この会費3ペンスのイヴェントには、少なからぬマイルドメイのメンバーも参加した。「2つのクラブの関係は緊密であり、『相互に助け合おう』こそがマイルドメイとバウ・リベラルにおいて支配的な感情である。」クラブメンの多くは、クラブなんて遊んでばかり、といった批判に対する具体的な反証として、こうしたベネフィット活動に強いプライドを持っていたといわれる。[8)]

公開のイヴェントとしてマイルドメイで人気を集めていたものに、フラワー(・アンド・ヴェジタブル)・ショウがある。クラブメン(マイルドメイのメンバーに限らない)の手による植物や野菜の展示会のことで、驚くほど細分化された多くの部門において優秀な出品物にプライズが与えられた。最初のフラワー・ショウが開かれたのは1894年9月。類似のイヴェントを打つ近隣のクラブがほとんどなかったこともあって、このショウは予想以上の大人気を博し、これ以降夏季の恒例イヴェントとなる。ガーデンやホールのような施設に恵まれていたマイルドメイには、フラワー・ショウ開催の条件が整っていた。ショウの際にはダンスやコンサートも行なわれた。[9)] 1895年8月

15-16 日(木〜金)に開催された第2回フラワー・ショウの様子。

> 我々はやや早めにクラブに到着した。きれいな娘とは2人だけでいたいのと同じく、人混みを逃れて花を楽しみたかったのである... 素晴らしいホールの左側にある入口には大きなカウンターが置かれていて、色彩の調和のとれたシダや切り花の逸品が敷き詰められ、積み上げられていた。天井からも明るい色の陶器の花瓶に入れられた花がつり下げられていた。ホールの右側にもまた選りすぐりの出品物のコレクションがあり、ホール全体の長さに匹敵するような大きさのセンター・テーブルには、 植物栽培をする者の垂涎の的となるような多くの出品物が、素晴らしく趣味よく並べられていた。ステージもまた、シダやインド産の植物、何種類かのサボテンで飾りつけられていた。... 花と一緒になって、センター・テーブルには巨大なサイズの野菜も置かれていた。中でも目についたのが、エドモントン・リベラル・アンド・ラディカル・クラブの F.T. ギボンズが出品したカボチャだった。[10]

フラワー・ショウは大変な人気イヴェントであり、女性や子どもを含む多くの者たちがつめかけた。「またしてもフラワー・ショウが開催され、終了した。およそ 1500 人のクラブメン、その妻、子どもが、花を眺め、バンドに耳を傾け、きれいなランプのつけられたガーデンを逍遥して、一晩のきよらかな娯楽を心から楽しんだ。」[11]

同じく夏季のイヴェントに、ガーデン・パーティがある。クラブのガーデンに手入れをし，ランプ等で飾りつけ、ホールでのヴァラエティやコンサートと並行して、夏の夜をガーデンに集まってすごそうというものである。1898 年 7 月 16 日 (土) の様子。「多くのメンバーたちが夜の早い時間をガーデンで心から楽しんだ。ミリタリ・バンドは大いに腕を上げたところを見せた。バンドを聴きながら飲み物を飲みたいと思う者たちが、新しく置かれたテーブルに殺到した ... 9 時には [ホールの] 階上でコンサートが始まった。全部をひっくるめて入場料は 1 ペニであり、誰もがこれは安いと認めるに違いない。」[12]

フラワー・ショウに似たイヴェントとしては、 1896 年以降 6 月の恒例イヴェントとなった産業展示会をあげることができる。マイルドメイやその他のクラブのメンバーが制作した作品を展示するのが趣旨で、1896 年 6 月 16-19 日(火〜金)の展示会への出品物からいくつか具体例を列挙するならば、サイフォン、ミネラル・ウォーター用ボトル、油絵、エッチング、ブック・カヴァー、鳥かご、燭台、等、実に雑多である。[13] また、もっと出品されるアイテムの範囲を限定した展示会、例えば、動物の毛皮や鳥の剝製を揃えたファー・アンド・フェザー・ショウのようなイヴェントも人気を集めた。[14]

つづいて、スポーツにかかわるイヴェントに移る。直接にかかわった者の数は決して多くないが、1890 年代のマイルドメイにおいて圧倒的に熱心に取り組まれたスポーツはサイクリングである。19 世紀末のイギリスをある意味で象徴するアイテムであった自転車は、クラブの世界にも浸透し

ていた。サイクリング活動の中心を担ったのはクラブ内に結成されたランブラーズ・サイクリング・クラブであり、1898年1月27日（木）に開かれたこのサブ・クラブの年次総会の時点で、約60人のメンバーを持っていた。サイクリング・クラブには、CIU加盟クラブのメンバーであれば誰でも加入することができた。自転車を持っていない者たちのために、「例外的な条件で」自転車を貸与するシステムもあった。また、ロンドン北東部チングフォードには、マイルドメイのそれを含む16のサイクリング・クラブがライディングの際の集合場所や休憩場所として利用するタヴァン「ファウンテン」があり、サイクリストに対して部屋や飲食物を提供していた。サイクリング・シーズンはだいたい3月から10月までで、天候に恵まれない季節にはライディングは企画されなかったが、例えばサイクリング・クラブ主催の食事会やコンサートは冬季にも行なわれた。[15]

活動の核となるライディングは、多くの場合、他のクラブからも参加者を募るインター・クラブ・ランのかたちをとった。開催日はほぼ例外なく土曜か日曜である。

> マイルドメイ・ランブラーズによって企画されたインター・クラブ・ランが去る土曜の午後に催された。目的地はチングフォードはシウォードストウンのファウンテン・イン、この成長しつつあるクラブのカントリ・ヘッドクォーターである。ライディングの出発地点となるマイルドメイ・クラブの本拠、ニューイントン・グリーン34番地には、次のクラブから47人のライダーが集まり、活気のある様子を呈していた。すなわち、ノース・ロンドン・サイクリング・クラブ、エンタプライズ・サイクリング・クラブ、グランジ・サイクリング・クラブ、サウス・バーモンジ・サイクリング・クラブ、である。行程はなかなかよいコンディションで、アクシデントはほとんど起こらなかった。... [「ファウンテン」到着後には] コンサートが行なわれた...[16]

1897年の事例から、サイクリングの行先を列挙しておこう。5月1日（土）リトル・バークムステッド(ハートフォードシア)、5月2日（日）リッチモンド、7月10日（土）ヘイヴリング・アット・バウア(グレイター・ロンドン)、7月11日（日）ウォルトン・オン・テムズ(サリ)、8月21-22日(土～日）ブライトン、10月9日（土）ポターズ・バー(ハートフォードシア)、10月10日(日）エンフィールド(グレイター・ロンドン)。[17]

1896年4月10-13日（金～月)に行なわれたツアーからは、サイクリストたちの健脚ぶりがうかがえる。おそらく、相対的に若いクラブメンの参加が多かったのであろう。

> 去る金曜の朝早いうちから、曇りがちだが雨降りにはならない天候の下、マイルドメイ・ランブラーズ・サイクリング・クラブのメンバーたちがボーンマスへ向けて出発した。途上、我々はキングストン、リプリ、ギルフォードを経由し ... 素晴らしい景観のファーナムで食事をとった(同行してきたが、土曜の仕事のためにロンドンへ戻らねばならない者たちとは、ギル

フォードで別れた)。食後、我々は古くからのカシドラル・タウン、ウィンチェスターへと向かい ... さらにサウサンプトンまで走ることにした。90マイルを走行してサウサンプトンに到着したのは午後8時頃だった ... 我々はまず土曜の朝にドックを訪ね ... しばらく町を見て回ってから、リングウッド、そして、本当に素晴らしく、しかし勾配のきついニュー・フォレストを通って、サウス・コーストの行楽地の中の女王である町に無事かつ元気に到着した。... 日曜の朝には早起きをし、町並みや、壮麗な庭園、遊歩道、そして見事な砂浜をじっくり時間をかけて見学した。... 我々は再び自転車に乗り、ソールズベリを目指した。38マイルを走破してソールズベリに着いたのは午後9時30分だった。... [翌13日] 我々は早朝からロンドンに向かい ... クラブに戻った。86マイルの旅の後でも我々は元気で、むしろ体調がよく、強くなったように感じていた。誰もが大声でツアーを讃えていた。4日間の総走行距離は231マイルに及んだ。[18]

ライディング以外にも、レースが企画された。これは複数のクラブからサイクリストが参加するレース・ミーティングと、マイルドメイ内部で毎年開催されるクラブ・レースとから成る。主要な種目は10マイル・レースだったようである。[19]

スポーツ・イヴェントという括りはあまり適切ではないが、サイクリングと同じく「お出かけ」の性格を持つイヴェントに、ヴィジト、イクスカーション、アウティング、等がある。ここでは、「お出かけ」として一括して扱う。サイクリングほど頻繁にではないが、同様に天候に恵まれた季節の土曜や日曜に、「お出かけ」が企画された。1896年6月20日(土)の「お出かけ」について見てみよう。

我々はキャノン・ストリートを3時15分に出発した。うれしいことに我々の客車は予約されていて、サウス・イースタン鉄道の狭くて換気の悪い客車にいつものように詰め込まれずにすんだ。ウリッジ・アースナルに到着すると、協同組合のチェアマンであるハード氏が出迎えに来て、その後、農場や豚小屋を案内してくれた。... 充分満足し、リフレッシュもした我々は、ロンドンから簡単に訪れることのできる最も美しい場所の1つである松林を抜け、プラムステッド・ラディカル・クラブへ向かった。クラブではきわめて友好的な歓迎が待っていたが、ロンドン行きの汽車をつかまえるために、残念ながらいささか早々にクラブを辞さなければならなかった。半日の遠出に大変満足して、我々は10時20分頃に帰宅した。[20]

1860年代以来取り組まれてきたCIU主催の「土曜午後のお出かけ」(主として博物館や歴史的名勝を訪ねレクチャーを受けたりする、最も頻繁に訪問されたのはブリティッシュ・ミュージアム)は20世紀に入るまで根強い人気を保つが、1890年代になると個々のクラブの独自企画も盛んになっていた。[21]

クラブの運動会とでも呼ぶべきイヴェントが、スポーツ・カーニヴァルである。1896年8月15日(土)のそれについて見てみよう。主催者は前述のランブラーズ・サイクリング・クラブと、同じくマイルドメイ・クラブ内のアスレティック・クラブ。会場はロンドン北部スタムフォード・ヒルのティー・トゥー・タム・グラウンド。基本的にはマイルドメイのイヴェントだが、CIU加盟クラブのメンバーであれば参加できた。観覧料は6ペンス(ただし、グランド・スタンドは1シリング、14歳未満の子どもは3ペンス)、競技種目に参加したい場合は1シリング6ペンス(種目によっては1シリング)を支払う必要があった。誰でも参加できた種目は以下の通り。300ヤード障害物競走、150ヤード障害物競走(15歳未満向け)、100ヤード障害物競走(45歳をこえる者向け)、1マイル自転車障害物レース、綱引き(6人で1ティーム)、袋競走。次の種目にはサイクリング・クラブのメンバーだけが参加できる。半マイル自転車障害物レース、自転車チャンピオンシップをかけた10マイル・レース、マイルドメイ・ラディカル・クラブ・チャンピオンシップをかけた440ヤード競走。各々の種目にはプライズがつき、例えば、150ヤード障害物競走の場合、1等賞は銀の時計、2等賞はアルバム、3等賞は銀の鎖と印章だった。競技の進行中はクラブのミリタリ・バンドが演奏をつづけた。[22] こうしたイヴェントへの要求は強かったと見え、1898年8月13日(土)には、マイルドメイのカーニヴァルはノース・ロンドン・クラブとの共催イヴェントとして、より大規模に開催された。[23]

毎年恒例になっていたスポーツ・イヴェントに、ボクシング・コンペティションがある。これはアスレティック・クラブが主催するもので、1898年4月7日(木)のそれを例にとると、以下のような階級に分けられていた。あらゆるアマチュアが参加可能な9ストーン級、ボクシング・コンペティションで勝った経験のないアマチュアが対象となる10ストーン6ポンド級、マイルドメイのアマチュアのみ参加可能な8ストーン6ポンド級。[24] その他のスポーツに関しては、CIUが企画するクラブ対抗トーナメントとして開催されることが普通だった。CIUが提供するトロフィを争奪するトーナメントは、クリケット、フットボール、ボート、水泳、ライフル、ビリヤード、あるいはスポーツではないがチェス、等について取り組まれたし、毎年イースター・マンデイには多くのクラブが一堂に会してアスレティック・コンテストが開催された。[25] また、アスレティック・クラブが公開演技を行なうこともあった。[26] ほとんどのスポーツ(スポーツ以外でも、例えばフラワー・ショウも)はその本質的な要素としてコンペティションを抱え込んでいるが、コンペティションを媒介にしたクラブメン相互の結びつきが重要な意味を持っていたことは、クラブ・ライフの注目すべき特徴であると思われる。この点については、後段で改めて触れたい。

娯楽全盛とはいえ、「シリアス」なイヴェントがクラブの世界から姿を消していたわけではない。すでに触れたベネフィット・イヴェントは、しばしば政治的・社会的なインプリケイションを伴っていた。例えば、1897年9月8日(水)のコンサートは、この頃展開されていた機械工のストライキの支援を目的としていた。

... 我々が到着した時、ホールはかなりガラガラだった。この夜を通じて、ホールに大勢が集まることはなかった。この日の集まりの議長を務め、機械工のロック・アウトについて簡潔なスピーチを行なったホウルドゲイト氏［マイルドメイの会長］は、この場には来ていないがティケットを購買した者はたくさんいること、1人で40枚のティケットを引き受けた者も複数いること、を断言した。この集まりは機械工合同組合［ASE］のストライキ・ファンドを支援するためのものであり、「組織された資本主義に抗するASEの輝かしい闘いがファンド不足を理由に敗北するようなことがあってはならない」という指摘があった。

ティケットは結構売れたということだが、この種のイヴェントは必ずしも多くのクラブメンを動員できる企画ではなかった。コンサートだけでは不充分だったらしく、マイルドメイではその後ストライキ支援のための寄付金集めが取り組まれた。こうした取り組みは、「クラブ関係者は労働の大義のために闘う者たちを助けることよりも自分たちが楽しむことに関心がある、という考えを除去することになるだろう」。[27] 大人気というわけにはいかなくても、こうした活動はまだまだ取り組むに値するものと認められていた。

この時期、マイルドメイ・クラブ内のポリティカル・カウンシルが最も精力的に活動したのは、議会やローカル・ポリティクスにかかわる選挙に際してであったと思われる。中でも顕著なのが、ロンドン・カウンティ・カウンシル（LCC)、さらにはもっと身近な教区会委員の選挙への積極的な関与である。これはマイルドメイ以外の少なからぬクラブにおいても見られた現象であった。1898年のLCC選挙に向けてのマイルドメイの活動について、以下のような叙述が残っている。

LCC選挙をにらんで、ポリティカル・カウンシルはクラブのホールで一連の公開集会を組織し、開催した。多くの出席者を得て、これらの集会は大成功を収めた ... 去る木曜日、カウンシルはLCCの仕事に関するランタン・レクチャーでこうした一連の屋内集会を締めくくった。H. W. ネトルシップ師によるこの見事なレクチャーを、300人の聴衆は大いに楽しんだ ... カウンシルは屋外集会をも何回か企画したが、天候に恵まれなかった。しかし、カウンシルは一群の精力的な選挙運動員を組織しており、我々の地元の候補者たちのためにベストを尽くしているものと考えてよいだろう。

後に見るレクチャー等と比べると、選挙にかかわるこの種のイヴェントはそれなりに無視できない動員力を持っていた。また、ローカル・ポリティクスの選挙に限らず、議会選挙においても、特定の候補者を支持・支援するばかりでなく、クラブとして候補者をノミネイトすることがあった。そして、候補者の側から見てもマイルドメイのような大規模クラブの集票力はきわめて魅力的であったから、選挙運動期間中には少なからぬ候補者がクラブを訪ね、集会に出席して、クラブメンと意見交換する機会を持った。クラブの動向が選挙の大勢を左右することも珍しくなかった。[28]

しかし、選挙運動を離れると、クラブの「シリアス」な活動が高揚をみせることは明らかに少なくなっていた。[29] こうした事態を前に、ポリティカル・カウンシルも娯楽性の強い企画を打ち出すようになる。例えば、1898年7月20日（水）のグラッドストンの生涯を主題とするレクチャーでは、講師を務めた写真家が数多くのランタン・スライドを使って語ったばかりでなく、話の節目には何度かアシスタント役が登壇し、解説を加えた。レクチャー後には、男性合唱等のアトラクションがつづいた。レクチャーにも、聴衆をひきつけるエンタテインメント性が求められたのである。[30] ポリティカル・カウンシル主催の「お出かけ」も、娯楽性を強調する企画だろう。

> ポリティカル・カウンシルが主催したシーズン最後の土曜［1898年9月17日］のお出かけは、大変に愉快なものであった。フラー氏、アーガイル氏に率いられて、我々はウリッジの協同組合の店舗、パン製造所、作業場、プラムステッドの素晴らしい新店舗、そしてボストル・ヒースの農場を訪問した。... ボストル・パーク・ガーデンズでは第一級のティーがふるまわれ、美しい林の中を静かに散歩した後、我々は協同組合執行委員会への感謝の気持ちを抱きながら帰途についた。[31]

ポリティカル・カウンシルの側には、「お出かけ」を通じて協同組合運動に親しんでもらいたいという狙いがあったわけだが、例えば、協同組合の理念や歴史についてのレクチャーのような企画に比べて、はるかにリラックスした手法がとられている。「楽しみ」の要素に訴えることの必要性が、かつて以上に強く認識されるようになっていたのである。

娯楽全盛の1890年代において、凋落傾向をはっきりと見せていたイヴェントといえば、何よりもレクチャーだろう（レクチャーと並ぶ教育イヴェントの柱だったクラスは、1890年代になる以前にすでに衰退していた）。多くの場合、レクチャーは週スケジュールに組み込まれており、段々と日曜午前のような「いい時間帯」から追い立てられていたわけだが、毎週のルーティン・イヴェントとは別に設定されることもあった。この時期のマイルドメイで目につく企画に、1897-98年に開かれたユニヴァシティ・イクステンション・レクチャーがある。これもポリティカル・カウンシルが組織したもので、ロンドン大学のユニヴァシティ・イクステンション・スキームとの連携によって企画された、ロンドンの地方行政制度をテーマとする連続レクチャーである。講師エドワード・スレイターはロンドン大学のスタッフ。充てられたのは「人気のない」水曜夜（20:30～）、料金は10回のコース（実際には11回のレクチャーが行なわれている）でマイルドメイないしCIU加盟クラブのメンバーが1シリング、それ以外の者が2シリング6ペンス、前者のカテゴリの者には単発のレクチャー料金2ペンスも設定された。かなりの意気込みで用意された大規模な企画だったが、クラブメンの反応は冷淡であった。レクチャーは人を集めることができず、財政的な重荷になるばかりだった。

このレポートを書いている今、10回のユニヴァシティ・イクステンション・レクチャーのうちの第7回が開催されている。聴衆は12名にも充たず、これまで7回のレクチャーに出席した者ののべ合計も100をこえないだろう。これがクラブに30ポンドもの財政負担をかけ、2000人のメンバーを持つクラブで行なわれている誰でも出席できるレクチャーの現実なのである。残念ながら言わなければならないが、この現実がこの種の企画をやかましく要求する者たちへの回答である。クラブの委員会もメンバーも、こういったことでこれ以上クラブのファンドを浪費すべきではない...

レクチャーの人気低落については、次節で改めて考察したい。[32)]

自身クラブマンであった T.S. ペピンが1895年に出版した『労働者のクラブ・ランド』には、1890年代のロンドンのとあるクラブで企画されたレクチャーの様子について、以下のように述べた部分がある。

次の日曜が来る。私は、レクチャーを行なうことになっている友人とともに、ベスナル・グリーン・ロードにつながる通りに面したとある小さなクラブに向かう。レクチャーは11時30分に始まると告知されているが、実際問題としては、どんなに早くとも12時までは始まらないことがわかっている。そのため、クラブに到着しても、20分ほどつぶさなければならない。我々は委員会室に招き入れられる。そこでは委員会メンバーが何人か喋っていて、我々が入ってくるのを見ると、座るようにと言い、礼儀正しいことに、これから行なうレクチャーの内容について若干質問する。...

12時になる。

5分すぎにクラブのポリティカル・セクレタリがやってきて、我々を階下へ連れていく。ホールに入るとたくさんの空席が目につく。私はともかく、友人はこれからどんなことになるのだろうかといぶかる。大きな音でベルが鳴るが、ホールに入ってくるのは4人くらい。さらに5分が経過すると、さすがの私も少々不安になる。

議長が入ってきて友人と握手をし、それから2人は演壇に上っていく。

その2分後、席に着いているのは25人ほどである。

もう一度ベルが鳴る。

議長が簡潔なスピーチで友人を聴衆に紹介し、それからレクチャーが始まる。過去の時代の人々の大胆でロマンティックな行為が語られ、ホールも徐々に埋まっていく。[この日の演題は「エリザベス女王時代のイギリスの船乗りたち」]

レクチャーは好評で、聴きにいった方がいいという私的なメッセージがクラブ中に伝わる。12時30分頃になると、ホールには100人ほどの労働者がいて、見事に静まりかえり、注意を集中させてレクチャーに聴きいっている。そして、この人数はレクチャー終了まで増えつづけ

る。

聴衆の中にはマグを持ち込む者もあるが、講師は特にこれに文句はつけない。すべてが問題なく進行する。

...

レクチャーが終わると、素晴らしい大喝采がわく...

クラブにおけるレクチャーの雰囲気がかなりイージ・ゴーイングだったことは、フレデリック・ロジャーズの比較的よく知られた自叙伝における次の叙述からも読みとれる。

私は依然として時々はクラブの活動にかかわっており、日曜午前に開かれるイングランドの歴史や文学についての私のレクチャーは、ロンドン東部のクラブ・ライフの恒例の催しになりつつあった。1884 年 2 月、ベスナル・グリーンのコモンウェルス・クラブにおいて、私は「チャールズ 1 世とイングリッシュ・コモンウェルス」について 4 回連続のレクチャーを行なった。... しかし、私はクラブ運動のできることについて幻想を失おうとしていた。その社交的な価値は理解できたが、私は別の価値を求めていた。ある午前のレクチャーの時、シェイクスピアについて語っている最中に、私はビールの売り子を会場に入れるために休憩をとりたいと要求された。クラブの活動にかかわるのもそろそろお終いになると私が悟ったのは、この時のことである。[33)]

イヴェントを列挙することはさしあたりここで打ちどめとし、次節ではこれまでのデータをもとに考察を展開していきたい。

註

(1) *Club World,* 6 July 1895.

(2) *Club World,* 20 Oct., 15 Dec. 1894, 14 Nov. 1896.「男性中心の世界」としてのクラブについては、さしあたり前掲拙稿 p. 33。

(3) *Club World*, 2 Jan. 1897.

(4) *Club World*, 15 Jan. 1898.

(5) *Club World*, 29 Feb. 1896, 2 Jan., 20 Feb. 1897, 15 Jan., 26 Feb., 19 Nov. 1898.

(6) *Club World*, 3, 10, 24 Nov., 1 Dec. 1894, 7 Dec. 1895, 6, 27 Nov. 1897, 26 Feb., 26 March 1898.

(7) *Club World,* 26 March 1898. なお、ステュアードとはクラブのホストとして働くべく雇用された職員で、クラブの整理整頓や飾りつけ、リフレッシュメントの販売、連絡事項の告知、等を管轄するのが通例であった。ただし、被雇用者であるステュアードは雇用者たるクラブのメンバーの地位を得ることはできない。Working Men's Club and Institute Union, *Occasional Papers 18: The Duties of Club Stewards,* London,

1871; B.T. Hall, *500 Points in Club Law and Procedure*, London, 1915, p. 24.

(8) *Club World*, 3, 24 Nov., 1 Dec. 1894; Marlow, *op. cit.*, pp. 633–4.

(9) *Club World*, 22 Sept. 1894, 21 Aug. 1897. マイルドメイでは1895年5月に新しいクラブ・ハウスがオープンするが、それ以外にも次のような施設を持っていた。「書記のオフィスが併設された大変広く気持ちのいい委員会室」「大きくて快適な応接室」「やや手狭で薄汚い図書室［とはいえ、蔵書は400冊近くに達する］」「ストックの充実したバー」「素晴らしい状態にある7つのフル・サイズのビリヤード・テーブルや、その他バガテル、キャノン、カード、等のためのいろいろなテーブルが置かれているビリヤード室」、そしてガーデンとグラウンド(広さは80フィート×30フィート)。マイルドメイはきわめて施設に恵まれたクラブである。*Club Life*, 7 Jan. 1899.

(10) *Club World*, 17 Aug. 1895. ガストンは花の効用について次のように語っている。「音楽を愛する魂の持ち主で法を侵す者はほとんどいない... 花を育てることに情熱を傾ける者も音楽愛好家と同様である。いずれも立派な市民、社会のよき一員である。」*Club World*, 14 Sept. 1895.

(11) *Club World*, 3 Sept. 1898.

(12) *Club World*, 11, 25 June, 16, 23 July 1898. ただし、夏季には活動の水準を著しく低下させてしまうクラブが多かったことは、確認しておく必要があるだろう。夏季の活動が困難であることは、1871年にCIUがこの問題に関するパンフレットを出版しているように、早くから認識されていた。クラブ以外が企画する冬季には不可能ないろいろな屋外イヴェントと競合することが最大の理由で、換気技術の水準を考えれば、夏の暑さがクラブの屋内イヴェントの重大な障害になったことも推測できる。「暑い気候によって... クラブはメンバーが集まってこないという事態に陥っている。メンバーは、クラブのホールの中よりも屋外の公園やガーデンを好むのである。」自らのガーデン等を持ち、様々な屋外イヴェントを企画できるマイルドメイのようなクラブは、例外的な存在だったのである。*Workmen's Club Journal*, 13 Nov. 1875; *Club World*, 29 June 1895, 20 June 1896; Working Men's Club and Institute Union, *Occasional Papers 19: Club Work in Summer-Time*, London, 1871.

(13) *Club World*, 1 Feb., 14 March, 13, 20 June 1896.

(14) *Club World*, 6, 20 Nov. 1897.

(15) *Club World*, 13 June 1896, 22 Jan., 12 Feb., 12 March 1898.

(16) *Club World*, 19 Oct. 1895.

(17) *Club World*, 14 Sept., 2 Nov. 1895, 16 May 1896, 1 May, 3 July, 14 Aug., 2 Oct. 1897.

(18) *Club World*, 18 April 1896.

(19) *Club World*, 16 May 1896, 2 Oct. 1897.

(20) *Club World*, 27 June, 18 July 1896, 22 May 1897.

(21) Working Men's Club and Institute Union, *Eighth Annual Report, 1869–70*, pp. 6–10; Ditto, *Ninth Annual Report, 1870–71*, London, [1871], pp. 3–4; Ditto, *Tenth Annual Report, 1871–72*, London, [1872], pp. 7–8; Ditto, *Eleventh Annual Report, 1872–73*, London, [1873], p. 6; Ditto, *Twelfth Annual Report,*

1873–74, London, [1874], pp. 8–9; Ditto, *Thirteenth Annual Report, 1874–75,* London, [1875], p. 12; Ditto, *Seventeenth Annual Report, 1878–79*, London, [1879], p. 11; Ditto, *Eighteenth Annual Report, 1879–80,* London, [1880], p. 13; Ditto, *Nineteenth Annual Report, 1880–81*, London, [1881], p. 8; Ditto, *Twentieth Annual Report, 1881–82,* London, [1882], pp. 12–3; Marlow, *op. cit.,* pp. 599–600; 前掲拙稿。マーロウの博士論文及び拙稿には「土曜午後のお出かけ」は 1870 年に始まったとあるが、これは誤り。この機会に訂正しておく。

(22) *Club World*, 1, 22 Aug. 1896.

(23) *Club World*, 2 July 1898.

(24) *Club World*, 26 March 1898.

(25) Working Men's Club and Institute Union, *Ninth Annual Report, 1870–71,* p. 5; Ditto, *Tenth Annual Report, 1871–72*, p. 7; Ditto, *Twelfth Annual Report, 1873–74*, pp. 9–10; Ditto, *Thirteenth Annual Report, 1874–75,* p. 14; Ditto, *Sixteenth Annual Report, 1877–78,* London, [1878], p. 13; Ditto, *Seventeenth Annual Report, 1878–79,* p. 12; Ditto, *Eighteenth Annual Report, 1879–80*, pp. 13–4; Ditto, *Nineteenth Annual Report, 1880–81,* p. 7; Ditto, *Twentieth Annual Report, 1881–82,* p. 13; Ditto, *Twenty-First Annual Report, 1882–83*, London, [1883], pp. 15–6; Ditto, *Twenty-Second Annual Report, 1883–84*, London, [1884], p. 13; Ditto, *Twenty-Third Annual Report, 1884–85*, London, [1885], pp. 14–5.

(26) *Club World*, 10 Dec. 1898.

(27) *Club World*, 11 Sept., 9, 16, 23 Oct. 1897.

(28) *Club World*, 15 Dec. 1894, 6 July 1895, 11 Dec. 1897, 26 Feb. 1898; Ridge, *op. cit.,* p. 136; Taylor, *op. cit.,* pp. 46–7.

(29) *Club World*, 6 Oct. 1894, 23 Nov. 1895. 第 3 節も参照。

(30) *Club World*, 28 May, 2 July, 8 Oct. 1898.

(31) *Club World*, 24 Sept. 1898.

(32) *Club World*, 2, 16 Oct., 6 Nov., 4 Dec. 1897, 8, 15, 22 Jan., 5, 12, 26 Feb., 5 March 1898.

(33) Frederick Rogers, *Labour, Life and Literature: Some Memories of Sixty Years,* London, 1913, pp. 95–6; T. S. Peppin, *Club-Land of the Toiler: Exemplified by the Workmen's Club and Institute Union,* London, 1895, pp. 53–7.

第 3 節　イヴェントに見るクラブ・ライフ

クラブのイヴェントのあり方を手がかりに、この時期のクラブ・ライフの特徴について、これまでの議論でも重要な史料として利用してきた新聞『クラブ・ワールド』のエディター、リチャード・ガストンの叙述も参考にしながら、考察を加えていきたい。

誰の目にも明らかなのは、娯楽の優位である。週スケジュールのうち、人の集まりやすい時間帯

はほぼ娯楽イヴェントによって占められていたし、イレギュラーなイヴェントの中でも停滞しがちだったのは何よりもレクチャーであり、政治的・社会的な企画であった。そして、マイルドメイの場合、新しいクラブ・ハウスのオープンによって、こうした娯楽優位の傾向に一層拍車がかけられた。多くのメンバーの「労働奉仕」に大いに依存して建設された新クラブ・ハウスがオープンしたのは1895年5月25日のことであるが、新クラブ・ハウスを建設した以上、クラブに多くの人々をひきつけ、クラブを財政的に安定させることが従来以上に求められることになった。動員の容易なイヴェントをなお一層前面に出すという対応がとられたのはごく当然だろう。しかも、新クラブ・ハウスの主要な機能はホール(約800人を収容する)としてのそれであり、充実した設備に裏づけられた多彩な娯楽イヴェントこそが最大の魅力と考えられていた。新クラブ・ハウスのステージは、「ロンドンで最高のステージの1つであり、ほとんどいかなる芝居でも上演できる」と評された。マイルドメイの用意するプログラムは、いよいよ娯楽に支配されるようになっていった。[1] 1895年1月のマイルドメイのレポートは言う。「娯楽への要求は日々大きくなっている。大きなスケールでエンタテインメントが提供されうるような広いホールが必要である。」 新クラブ・ハウスを利用して日曜午前のレクチャーを企画したいというポリティカル・カウンシルからの提案は、多くの動員が期待できないとの理由で執行委員会に拒否された。勿論、「シリアス」なイヴェントが姿を消していたわけではなく、マイルドメイとしても、クラブにやってくる人々の多様な要求に応えているという自負は時々に表明していた。とはいえ、次の引用から、重点がどこにあるかは明らかであろう。「あらゆる地域から、メンバーや友人たちがマイルドメイに大挙してやってくる。彼らは皆、わざわざ出かけていくに値する何かをマイルドメイで観たり、聴いたりできると信じているのである。そして、それが音楽的なものであれ、芝居にかかわるものであれ、あるいは実用的なものであれ、彼らはあらゆる嗜好に対応する何かを得ることができる。それゆえ、誰もが満足するのである... シリアスな者たちであっても、レクチャーを受けることができる。しかし、シリアスな者の数はきわめて少ないので、エンタテインメントが企画のうち最大の数を占めるのは間違いない。」[2]

ガストンが拠点にしたのはボロウ・オヴ・ハックニ・クラブ(マイルドメイに劣らずロンドンにおいて主導的な存在だった)であるから、 彼の言説はマイルドメイの状況を直接的に語っているわけではない。しかし、娯楽優位の傾向はマイルドメイに限られた現象ではなかった。また、『クラブ・ワールド』のエディターとして、ガストンは所属クラブ以外の事情にも通じていた。マイルドメイがいかなる場であったかを理解しようとする際にも、ガストンの発言には傾聴すべき内容が含まれている。ガストンによれば、クラブは「軽い社交娯楽」の時代を迎えていた。「疑いもなく、人は知識ではなく楽しみを求めてクラブに加わる。したがって、社会に対する任務とか、属してもよい政党とかについてレクチャーしようなどと試みると、彼は必ず憤慨するのである。クラブがその創設者たちの意図とは完全に離れたところまで来てしまったことは、間違いない。」どうして娯楽ばかりが人気を集めることになるのか？

娯楽が民衆の心の中で一番の場所を占めていることは確実である。これはなにもクラブに関してだけではなく、社会全般に関して言えることである。劇場やミュージック・ホールが各地につくられている。クラブが大規模になればなるほど、ショウが占める割合はいよいよ大きくなる。四半世紀前に比べて、生活は楽に、賃金は高額になっている。そして、民衆は現状により満足しているのである。

クラブのメンバーになるような者たちの相対的な富裕化こそが、「軽い社交娯楽」の時代を招いた根本的な要因と考えられた。したがって、こうした傾向は必ずしも憂慮すべきこととはみなされなかった。

勿論、どんなクラブにも次のように論ずる熱心な者たちがたくさんいる。我々の組織が政治的なそれから社交的なそれへと変わると、堕落がもたらされ、メンバーはシリアスな仕事に興味を失ってしまうだろう、と。しかし、その逆になるのがほとんどである。メンバー数は増加し、選挙の時にはより大勢が進歩のための闘いに加わっている。多くの政治的クラブは、政治的なふりをしていただけなのである。それゆえ、レクチャーが開催されても12人かそこらのインスージアストしか集まらなかった。[3)]

「社交的クラブ」の「シリアス」なコミットメントに関するガストンの認識にいささか過度に楽観的なトーンがあることは否定できないが、娯楽の優位が「シリアス」な活動の消滅に直結しているわけではないという指摘は重要である。

クラブの現状に不満を覚える者は少なくなかった。「疑いもなく、時代から取り残されている古い世代の人々の中には、クラブを最初にスタートさせた人々の当初の意図が逸れてしまい、かつては講師やエッセイの朗読者が占めていた演壇やステージを歌手とダンサーが独占している現状を、残念に思う者がいるだろう。」例えば、かつてチャーティストとして活動したことがあったボロウ・オヴ・ベスナル・グリーン・クラブのジェイムズ・モードゥンは、1899年のインタヴューの中で、クラブの教育的活動が不充分なため、「我々が今日享受している言論の自由や安価な新聞を獲得するために努力した人々のキャリアが、嘆かわしいほど労働者に知られていない」ことへの不満を表明している。1867年から1883年までCIUの書記を務めたホジスン・プラットも、同様の不満を抱えていた。1896年9月26日、CIUの年次集会において彼は演説している。「その発端から自分自身が記憶しているクラブ運動を振り返ると、私は多くの変化が起こったことを認めなければならない。そして、それは間違いなく最善の方向への変化ではない。私はコンサート・ホールやビリヤード・サルーンに行きたいとは思わない。こうした場所では実に多くの時間が浪費されているように思えてならないのである。」ロンドンのクラブを活動の拠点としていた時期のあったアナキスト、フランク・キッツの回顧録にも、次のようにある。「随分前からクラブは中流階級や酒造業者に

よって操作されてしまい、講師がいるべき場所でアマチュアのニグロ・ミンストレルが行なわれている。」[4]

こうした人々に対し、ガストンは批判的である。「プラット氏は想起しなければいけない。人々の嗜好が変化していること、そして、まじめだった1つの時代につづいて、軽薄さと最も軽い種類の娯楽への欲望に充ちた別の時代が来ることを。我々はこういう時代に生きているのである。プラット氏がどんなに嘆こうとも、残念ながら、彼の演説や忠告は聞く耳を持たない者たちには届くまい。」「クラブの最初のプロモーターの高い理想からの逸脱を嘆く者たちに対してできるのは、同情の意を伝えることだけである。教育がクラブをスタートさせる唯一の理由だった時代の感情に復帰することなど不可能である。」[5]

> クラブのレクチャーへの出席者が少なく、クラブのメンバーが政治的・社会的な時事問題に関心を示さない事実がしばしば指摘される。レクチャーが喜ばれず、音楽や芝居を内容とする娯楽であれば間違いなく何百という人間が集まる事実を直視せずしてどうするのか？ レクチャーを企画してホールを満杯にできるだろうなどと楽観的に述べるような者は、ありきたりな水差しとグラスの置かれたテーブルのある演壇からのレクチャーという昔ながらのやり方以外に、現在では教育のための多くの方法があることを理解していないのである。あらゆる問題についての最良の情報を載せ、 読者の関心をひくべく執筆された日刊新聞や夕刊新聞がある。
>
> ...
>
> 次のことは認識しておいた方がいい。クラブではいろいろな読み物が提供されるので、政治的・社会的問題の知識において、クラブのメンバーはかつてよりもはるかにすすんでいる。彼らは、退屈でおもしろくない講師の嫌気がさすようなレクチャーに出席し、うんざりするなどということを避けようとするのである。[6]

ガストンの議論の趣旨は、いわば「問題意識薄弱な最近の連中」を批判したがる者たちの現状認識の甘さを指摘することにある。クラブメンはレクチャー以外の方法で従来以上に政治的・社会的問題の知識を得ているのであるから、工夫もなくレクチャーを企画し、集まりの悪さを嘆くだけでは怠慢なのである。レクチャーの人気が低落したからといって、それは政治的・社会的問題への関心一般の衰退を意味するわけではない。1890年代に目撃されていたのは、ロンドンにおけるクラブと政治のかかわりを論じたジョン・デイヴィスの表現を用いるならば、「ごく少数の職人エリートによる仲間を説得・動員しようとする活動」に基礎づけられたような種類の政治的・社会的なコミットメントの衰退であった。「ごく少数の職人エリート」 が政治的・社会的問題についての知識や経験を独占し、それをレクチャー等を通じて提供することによって他の労働者をリードしていく、といったやり方は、明らかに時代遅れになりつつあったのである。[7]

状況の変化をもたらしたものとして、とりわけ強調されるのが、労働者向けの新聞の普及である。

「ほとんどの労働者が日刊ないし夕刊の何らかの新聞を読み、時事的な重要問題についての知識を得ている。」[8] こうした認識は広く共有された。例えば、ボロウ・オヴ・ハックニ・クラブの副会長ヘンリ・イレットは以下のように言う。「私は、今ではレクチャーはさして必要にされていないように思う。人々は日刊新聞から情報を得ているのであり、何度も語られたような話を聴く必要はないのである。クラブが最初にスタートした頃、人々には大勢が一度に集まる機会などなかった。安い新聞はほとんどなく、人々は現在ほどには教育を受けていなかった。だからこそレクチャーが必要とされたのである。しかし、今では講師の仕事は新しい勢力にとって代わられている。」[9] レクチャーから新聞へという労働者の情報源の移行の背景には、初等教育制度の導入等がもたらした労働者の教育水準の向上があった。1890年代ともなると、少なからぬクラブメンが公立学校に通った経験を持っていたはずである。成人教育の機会が相対的に充実しつつあったことも、重要な意味を持っただろう。もはや、労働者の多くは、クラブに来てまでわかりきったような教育、特にクラスのようなフォーマルなかたちのそれ、を受けることに魅力を感じなかった。「かつては他愛もなく想定されていた。教育が広く普及すれば、人々は自らが生活する国の問題に関心を持つようになるだろう、と。しかし、その反対が現実のように思われる。」これは、単に識字率の上昇が労働者向けの新聞の普及をもたらし、レクチャー離れにつながったというだけではない。教育水準の向上は労働者をめぐる様々な環境の改善と不可分であり、ここからいわば「満足した労働者」がうみだされている。「政治的な問題について、労働者たちはかなりよく満足している... 彼の賃金は我慢できる程度に高く、彼は相当の自由に恵まれている。以前は不可能だったような地位が、今では彼に対して開かれている。それゆえ、彼は落ち着き、現状をありがたく思うようになるのである。」「見たところ、労働諸階級は彼らの望むものをすべて手に入れてしまった。そして、彼らの興味をひかない『味気ない』活動に煩わされたくないと思っているのである。」[10]

レクチャーの人気低落を説明する要因は、勿論、これだけではない。レクチャーの質が満足すべき水準に達していなかったという事実も、例外は少なくないかもしれないにしても、見逃すことができない。娯楽に比較して、レクチャーはそもそも「人を集めにくい」わけであるから、様々なイヴェントが競合する環境の中でレクチャーがそれなりの動員力を示そうとするならば、芝居やヴァラエティ以上に、「質が高く、おもしろい」ものである必要があった。しかし、「内容のある話を、わかりやすく」デリヴァーする能力を持った講師を確保することは多くのクラブにとって困難な課題であった。CIU は無償でレクチャーを行なってくれる講師のリストを用意していたし、プロパガンダの効果を期待する急進主義者や社会主義者は常連の講師であり、シドニ・ウェッブ、エドワード・エイヴリング、エリノア・マルクス、ウィリアム・モリス、バーナード・ショウ、アニー・ベザント、等の著名人も登場した。しかし、彼らがクラブメンの興味をひきつけられるようなレクチャーをできたかといえば、話は別であった。ランタンを利用したり、実験を伴っていたりしたそれが人気を集めたように、レクチャーには人目をひきつける娯楽的な要素が求められたから、講師にも聴衆を退屈させないある種の資質が必要であった。レクチャーがつまらないので中座し、結局

バーに居座ってしまう者は少なくなかったのである。無能な講師が及ぼすダメージが大きいことは、早くから認識されていた。1872-73年のCIUの『年次報告』にはすでに以下のような指摘がある。「1つのインスティテューションで一度か二度つまらないレクチャーが行なわれれば、人々からもう一度レクチャーに出かけようという気持ちを実質的に消し去ってしまうことができるだろう。有能で有益な講師を確保することができたとしても、その後2-3年にわたって、聴衆を集めることはできないだろう。」[11)]

また、レクチャーを行なう側も、クラブの聴衆についていろいろと不満を抱えていた。例えば、1887年3月27日にボロウ・オヴ・ハックニ・クラブで「独占」についてレクチャーしたウィリアム・モリスは、以下のような印象を記している。

> それはメンバー数1600に達する大きなクラブである。汚れた、惨めな感じの場所で、職人たちがどの程度の水準で快適にしていられるのか、悲しい気持ちになってしまう。この日の集まりは満杯で、聴衆も集中していたと言ってよいと思う。しかし、ひっきりなしに人の出入りがあり、パイや酒の売り子が声を出すので、私の神経は逆撫でされた。聴衆は礼儀正しく、よく頷いていたが、ごくシンプルなレクチャーとはいえ、彼らの多くがそれを理解していたと楽観的に語ることは私にはできない。

ベルフォート・バックスの回顧録によれば、バーナード・ショウも次のような経験をしていた。「彼が話をすることになっていたクラブのメンバーが、ビリヤードをしていることがあった。開始時刻5分前に到着した彼が、ビリヤードをしている者に、彼がすることになっているレクチャーの時刻と場所を尋ねると、自分たちは『つまらないレクチャー』なんか聴きたくない、このままビリヤードをつづけるつもりだ、という返事であった。」クラブメンのレクチャー離れの要因として、他にも、レクチャーに固有の問題ではないが、換気や暖房、騒音遮断、等をめぐる会場の条件の劣悪さ、事前の宣伝の不充分さ、等が指摘できよう。[12)]

これまでレクチャーに代表させて考察してきた問題は、「シリアス」な活動、特に教育的なそれや政治的なそれ全般にかかわる。ガストンは、ロンドンの急進的クラブの連合体として1886年に結成された組織である首都急進同盟を事例に、クラブの政治的活動の衰退について論じている。「首都急進同盟のメンバーたちは、ただ会合を持ち決議案を採択することに満足しているのではなかろうか？... こうした活動からうまれるのは、演説と満場一致の決議だけである。かつてかくも卓越した実績を残した団体からは、それ以上のものを期待したい」。[13)] レクチャーの時と同様に、ここでも、ガストンの趣旨は政治的活動の衰退を嘆くことよりも、マンネリ化した活動しか展開できない政治志向の強い者たちのイマジネイションの欠如を指摘することにある。様々に状況が変化している中、レクチャーと同じく、ひたすら会合と演説と決議といった「古くさい」スタイルの活動を展開しても、成功するわけがないのである。それでは、「古くさくない」スタイルとはどんなものか？

1890年代に顕著に強まったのが、クラブと選挙活動、特にローカル・ポリティクス関連のそれとのかかわりである。教区会委員選挙への関与について、ガストンは言う。

> 先日の教区会委員選挙に際し、クラブは大変熱心に活動した。そして、ロンドンの多くの地域における勝利を記録できることは我々の喜びである。...
>
> ...
>
> ローカルな問題はあらゆる階層の者たち、政治的見解を異にする者たちによって運営されることができる。それゆえ、教区会委員選挙は政治的な名称を持たないクラブの関心をもひきつけうるのである。貧民への対処法の改善のためだったら、街頭照明や舗装状態をよくするためだったら、あるいは、健康的な衛生状態の維持に向けた設備のためだったら、社交的クラブであっても、政治的な名称を標榜するクラブと協力して活動することができる。これらの問題は、社会主義者にも、トーリにも、リベラルにも、同様にアピールするのであり、どんな立場の者であっても、我々の生活を明るいものとするために力を尽くすことができる。[14)]

ローカル・ポリティクスは、娯楽を好み、レクチャーなどには関心を示さないような者たちにも、活躍の場を与えた。この時期のクラブがかかわりを強めていた政治的活動とは、特別な経験や知識を要求しない、より日常的で身近な種類のものであった。[15)]

1894年12月、マイルドメイではクラブ名から「ラディカル」という単語を除去すべきか否かが議論された。こうした議論が浮上してくること自体、クラブの現実に照らして「ラディカル」の呼称はふさわしくないと考える者がかなりの数に上っていたことを示唆しているが、議論の帰結はメンバーの約3/4が名称改変に反対しているということであった。「ラディカル」の呼称が除かれてしまうと「最も有能で無私な労働者」がクラブを離れてしまうだろうという展望が、反対の論拠として強調された。「ラディカル」と名乗ることにどれほどの意味が込められていたかを推測するのは難しいが、いずれにせよ、メンバーの多くの認識では、クラブのイヴェントの大多数を娯楽が占めることと「ラディカル」を自称することとはさして矛盾していなかったと思われる。政治的な議論や活動はクラブ・ライフの中にそれなりに定着していたのであり、タブー視されていたわけではない。[16)]

新しい論点に移ろう。マイルドメイに集まる者たちは娯楽の質についていかなる思いを抱いていたのか？　娯楽イヴェントがクラブの舞台を独占するようになると、不可避的に生じてくる現象が内容のマンネリ化である。どんなに熱心なクラブメンであっても、あるいは熱心であればこそ、毎週似たような芝居やヴァラエティばかり観せられていたら、いずれは不満を覚えることになるだろう。マイルドメイにおいてもこうした事態がうまれていた。1898年5月21日づけのマイルドメイからのレポートは言う。「エンタテインメント・コミッティに対し、ヴァラエティの夕べに登場するカンパニを全面的に変えるべく大いに努力する必要性を訴える時、私はメンバーの多くが抱く見解

を表明しているにすぎないのである。」いかに人気があり、財政的にも安定していたマイルドメイといえども、契約しうる芸人の範囲には限界があり、どうしても似たような芸人がしばしば壇上に現れる事態が避けられなかった。芸の質ということでいったら、メンバー自身のパフォーマンスにもさしたる期待はできなかった(そもそも、クラブの娯楽はメンバー自身によるものが主流だったが、1890年代にはプロの芸人の優位が趨勢となっていた)。娯楽優位の傾向が定着していただけに、マンネリ化への不満はクラブの根幹を揺るがす危険性をはらんでいた。[17]

芸人の側も、新鮮なネタを提供すべく、それなりに努力はしていた。マイルドメイの事例ではないが、前述のウィリアムズは以下のように記している。

> あるジェントルマンが持っている劇団があって、私はそこでよく主役を演じていた。劇団の近所に労働者クラブが設立された。このクラブは、毎週異なる劇団と契約するのではなく、このジェントルマンと打ち合わせをして、この劇団が毎週ショウを行なうように取り決めた。記憶が正しければ、私は40週間にわたって毎週火曜に芝居をし、実に30種類もの役柄を演じた。あんなに狭いステージで芝居をできたなんて、今となっては本当に不思議である。[18]

40週で30の役柄といえば、かなりの頑張りと評価できよう。

おそらく、イヴェントのマンネリ化を招いた重要な要因の1つは、エンタテインメント・セクレタリをはじめとするクラブの役員の新旧交代がすすまなかったことである。1898年7月2日づけのマイルドメイからのレポートは、同じ顔ぶれの役員がつづいたために相互批判がなくなり、その結果クラブ運営が保守化しつつあることを指摘し、新しい人材の登場への期待を表明している。同じ人間が長期にわたってエンタテインメント・セクレタリの任務を担っていれば、どうしても「馴染み」の芸人がしばしば登場することが避けられないだろう。クラブ運営にコミットしようとするのがメンバーのごく一部のみで、少数の熱心な者たちとほとんど関心を示さないメンバーの多数派との二極分解がすすんでいる、という認識はガストンが表明するものでもあった。彼は、自分でクラブをつくった世代に代わって、クラブがすでに存在している状況の中に登場してきた世代がクラブメンのうちで多くを占めるようになったという事情によって、こうした事態を説明している。クラブ運営のマンネリ化・保守化という問題は、マイルドメイに固有のそれではなかったのである。[19]

娯楽イヴェントに関して、難しい問題が他にもいくつかあった。まず、有料入場制をめぐる他のクラブとの対立をとりあげよう。1890年代ともなると、クラブで催される娯楽イヴェントのうち、かなりの部分をクラブをサーキットして回るプロの芸人が担っていた。内容の充実を求める声が強まっていたマイルドメイにおいても、特にウィークエンドのイヴェントについては大いにプロの芸人に依存していた。プロの芸人を雇用すれば、大した出演料を支払うわけではないにしても、クラブメンが「素人芸」を披露する場合よりも金がかかるわけで、その分は多くの観客を動員し、彼らか

ら入場料を集めることで賄う必要が出てくる。通常の形態としては、入場に際して有料のプログラムを買うことが義務づけられた。プロによる娯楽が拡大すると、クラブを多少ともコマーシャルに運営すること、具体的には、イヴェントを「充実」させ、必要に応じて施設等にも手を入れて、多くの有料入場者を集めることが求められるようになる。しかし、有料入場制に反発する者は多く、1890年代にはその是非をめぐってしばしば論争がかわされた。マイルドメイでも有料入場制をとるケースが少なくなかったが、これに対し、ボロウ・オヴ・ハックニ・クラブが反発した。イヴェント参加者に入場料を課しているあらゆるクラブのメンバーを、ボロウ・オヴ・ハックニは自らの無料イヴェントから締め出したのである。ガストンはこの事態についてこう述べる。「クラブが無料のエンタテインメントを好むことには、何の問題もない。しかし、どうして他のすべてのクラブが同じようにすることを求めなければならないのか？　高額の賃借料を課され、小さなホールしか持っていないようなクラブが、どうやって金のかかるコンサートや芝居を無料で提供できるというのか？　ボロウ・オヴ・ハックニの賃借料は安く、しかもこのクラブは大きなホールを持ち、きわめて多くのメンバー数を誇る。だからこそ、このクラブには他のクラブよりも財政的に余裕があるのである。」きわめて冷静に、ボロウ・オヴ・ハックニによる無料入場制の主張が例外的な条件に恵まれてはじめて成り立つものであり、他のクラブにそれを要求することには無理があるという認識が打ち出されている。「... 我々は有料入場制を支持する。クラブの会費では、今日必要とされている金のかかるエンタテインメントを賄うには不充分であると考えるからである。もしも、こうした出資のために会費をあてにするようになったら、クラブは1カ月ももたずに閉鎖されることになろう。」[20]

マイルドメイの側も対抗措置をとった。ボロウ・オヴ・ハックニが締め出しの方針を撤回しない限り、マイルドメイはボロウ・オヴ・ハックニのメンバーに対して門戸を閉ざすこととしたのである。1873年に導入されたアソウシエイト・カード・システム(CIU が販売するアソウシエイト・カードを所持していれば、自分が直接所属していない CIU 加盟クラブをも利用できる)は、1875年に訪問先クラブでアルコールが購買できるようになると飛躍的に人気を高め、以降、このシステムを通じた様々なクラブのメンバーの交流は、クラブの世界の重要な特徴の1つとなっていた。ここに生じているようなトラブルは、アソウシエイト・カード・システムを掘り崩す意味を持っていたのである。1895年2月23日づけのマイルドメイからのレポートは次のように言う。「[マイルドメイの対抗措置の] 条件は間違いなく正当なものであるが、我々をトラブルから脱出されてくれはしない。」この指摘の通り、マイルドメイとボロウ・オヴ・ハックニの対立関係は簡単には解消されなかった。最終的にはボロウ・オヴ・ハックニも有料入場制を採用したようで、1899年のインタヴューにおいて、前述のイレットは、有料入場制がボロウ・オヴ・ハックニの財政的安定に寄与しているとの認識を示している。[21]

新クラブ・ハウス建設直前の段階で300−400程度だったマイルドメイのメンバー数は、1895年末には1173、1899年1月には「2500近く」に達した。予想された通り、最大の呼びものは充実

したステージだった。「マイルドメイはなんと素晴らしいステージを持っていることだろう！役者たちが『狭いところに押し込められ、閉じ込められ、監禁されてしまう』クラブと、なんと違うことか！... クラブのメンバーが1200名以上になり、毎週50名ほどが加入してくるのも、このクラブがかくも快適で至れり尽くせりであることを思えば、全く不思議ではない。」[22] メンバー数ばかりでなく、マイルドメイの娯楽イヴェントにやってくる観客数もまたかつてない水準に達した。マンネリ化を指摘されながらも、少なくとも相対的には充実したプログラムを組み、人気クラブとなったマイルドメイは、不可避的に混雑の問題を抱え込んだ。深刻なのはウィークエンドだった。例えば、クラブの世界では有名な劇団であったホレイス・ノーマンズ・カンパニが『イースト・リン』を上演した1896年10月4日（日）。この劇団の最後の登場であることがアナウンスされていたため、入場料が通常の2倍だったにもかかわらず、観客が殺到し、300−400人が門前払いされた。「... マイルドメイのホールはいささか不快なくらいに満杯になっている。」イヴェントにやってくる者たちは、開場前から長蛇の列をつくった。「急な階段のところで長時間にわたって立ち、大勢の人の圧力を受けるために、頑強な男たちまで気分を悪くしたり、ひどい時には気を失ったりする、という事態は、大変に深刻になってきている。つい先日のことだが、クラブのサイクリストの1人で、坂のきつい田舎道を1日に100マイルも自転車で走っても平気だった若い仲間が、今述べたことが原因で一時的に気絶した。ある時には、人々は押し合いへし合いしながら1時間半も立っていなければならなかった。」[23]

マイルドメイでは、早速ホールの開場時刻を早める（夜のイヴェントの場合、従来は20:00だったものを、ウィークエンドや特別な機会には18:00に、それ以外は19:00に）措置がとられた。[24] しかし、これだけでは混雑の問題は解消されえない。ホールの収容能力に限界がある以上、観客数そのものを操作しなければ、混雑はつづくことになる。この種の措置として打ち出されたのが、日曜午後の入場制限であった。他のクラブから観客が殺到したため、マイルドメイ自身のメンバーが自分の参加したいイヴェントに入ることができない、という事態をなんとか打開するために、手始めに日曜午後に限りノン・メンバーの入場を制限するものである（1896年10月から1898年5月まで実施）。これは不本意な措置であった。「日曜午後の観客を制限し、マイルドメイのメンバー自身に充分な座席を確保する、この問題を解決するための試みは、CIU加盟クラブのメンバーであれば『自分たちのクラブのメンバー』と同じように扱う、という原則を不幸にも曲げなければならない事態を招いた。」[25] しかし、意に反して採用されたこの措置も混雑解消の決め手にはならなかった。マイルドメイに魅力がある限り、多少の入場制限が施行されようとも、観客は集まってきた。「夜が涼しくなってくると、クラブには我々がとても収容しきれないくらい多くの訪問者がやってくる。彼らは依然としてあらゆるコンサートや芝居の夜に集まってくる。」[26]

かなり遠方のそれを含めた多くのクラブからニューイントン・グリーンに足を運ぶ者があったとはいえ、特にあおりを喰ったのはマイルドメイの近隣に位置する「あまり魅力のない」クラブだった。具体的に言及されているものに、シェイクスピア・クラブがある。「シェイクスピア・クラブの

メンバーの多くが、我々のクラブのエンタテインメントに毎回やってきている。我々のクラブの成功が近隣のクラブを傷つけてしまうのは残念なことだが、それが実態である」。マイルドメイのような設備に恵まれず、観客にアピールするイヴェントをなかなか提供できないクラブには、受難の時代が来ていたのである。大規模クラブが一層拡大していく中で，少なからぬ小規模クラブが存亡の危機に瀕していた。ガストンは、小規模クラブの受難に以下のような説明を与えてもいる。「... クラブ・ライフはメンバーの妻や娘、恋人の好みに規定されている。... 彼女たちは、有能な芸人によるコンサートやダンス、芝居を要求するが、こうしたものを提供し、賄うことができるのは、大規模クラブだけなのである。」[27]

また、娯楽がクラブのメイン・アトラクションとしての位置を占めるようになるとともに、「トラブルを起こしがち」な者たちがクラブに集まる傾向があったかもしれない。マイルドメイでも、器物破損、他のクラブメンへの中傷、クラブ内での奇矯な行動、といった理由で、追放されたり資格停止の処分を受けたりする者が増えてきている。クラブ内の規律のために、ある種の取り締まりが求められる事態が生まれてきたのである。1896年5月には、窃盗の犯人をつかまえるための報奨金が掲げられるに至っている。[28] この問題は別の機会に改めて検討する必要があるだろう。

註

(1) *Club World*, 10 Nov. 1894, 19 Jan., 2 Feb., 20, 27 April, 11 May, 24 Aug. 1895.

(2) *Club World*, 5 Jan., 2 Feb. 1895, 20 March 1897.

(3) *Club World*, 1 Dec. 1894, 18 Sept. 1897.

(4) *Club World*, 12 Oct. 1895, 3 Oct. 1896; *Club Life*, 15 July 1899; John Davis, 'Radical Clubs and London Politics, 1870–1900', David Feldman & Gareth Stedman Jones (eds.), *Metropolis London: Histories and Representations since 1800*, London, 1989, pp. 108–9; Frank Kitz, *Recollections and Reflections*, London, 1912, p. 12; Shipley, *op. cit.*, pp. 26–7, pp. 58–61.

(5) *Club World*, 12 Oct. 1895, 3 Oct. 1896.

(6) *Club World*, 16 Feb. 1895.

(7) Davis, *op. cit.*, pp. 111–3. ここで目撃されているような職人急進主義に特徴的な政治的活動の衰退は、クラブや労働者の「脱政治化」を必ずしも意味しない。cf. Jones, *op. cit.*, p. 182.

(8) *Club World*, 1 Dec. 1894, 16 Nov. 1895.

(9) *Club Life*, 3 June 1899.

(10) *Club World*, 16 Nov. 1895, 3 Oct. 1896; Burke & Worpole, *op. cit.*, pp. 38–9; Marlow, *op. cit.*, pp. 509–10, p. 552.

(11) *Club Life*, 29 April 1899; Working Men's Club and Institute Union, *Eleventh Annual Report, 1872–73*, p. 10.

(12) *Club World*, 27 Oct. 1894, 25 Jan. 1896; Burke & Worpole, *op. cit.*, p. 24; Hall, *Our Sixty Years*, p. 295;

Kitz, *op. cit.*, p. 12; Marlow, *op. cit.*, pp. 513–25, pp. 549–52; Peppin, *op. cit.*, pp. 56–7; Taylor, *op. cit.*, p. 59. 事前の宣伝をはじめとするレクチャー開催にかかわる実務(講師の送迎、小道具の用意、時間の厳守、等)に問題があることは、クラブ運動の初期から指摘される点であった。Working Men's Club and Institute Union, *Occasional Papers 13: Arrangements Recommended on the Occasion of the Delivery of Lectures at Working Men's Institutions*, London, 1870.

(13) *Club World*, 12 Jan. 1895.

(14) *Club World*, 23 May 1896. 少なからぬクラブメンがローカル・カウンシル等の公職に就いていることも、クラブとローカル・ポリティクスのかかわりを考えるうえでは重要なポイントである。Ashplant, *op. cit.*, pp. 241–2; Marlow, *op. cit.*, pp. 337–40.

(15) 勿論、こうした事態は、1867年の第2次選挙法改正以来、労働者票を確保すべく組織政党への変貌の努力をつづけてきた保守・自由両党との関係抜きには理解できない。クラブを利用して労働者票を組織するという考えは、いずれの政党にとってもきわめて魅力的だった。そして、積極的に選挙活動に身を投じていったクラブは、徐々に自立性を喪失し、政党政治の中に埋没していくことになる。Martin Pugh, *The Tories and the People, 1880–1935*, Oxford, 1985, p. 8; Burke & Worpole, *op. cit.*, p. 14; Davis, *op. cit.*, pp. 115–22; Taylor, *op. cit.*, pp. 53–6.

(16) *Club World*, 1, 8 Dec. 1894; T.G. Ashplant, 'London Working Men's Clubs', Eileen & Stephen Yeo (eds.), *Popular Culture and Class Conflict, 1590–1914*, London, 1981. p. 247.

(17) *Club World*, 21 May, 10 Sept. 1898; Ashplant, 'CIU and ILP', pp. 471–2; Taylor, *op. cit.*, p. 63. ただし、プロの芸人がクラブにおける娯楽の主流になった後も、費用負担の少なさや「参加型」の自由な雰囲気ゆえに、アマチュアによる娯楽も人気を保った。プロの芸人が台頭していく中でも「手作り娯楽」は残ったのであり、アマチュア娯楽→プロ娯楽の図式は単純には描けない。Marlow, *op. cit.*, p. 617, pp. 641–2.

(18) Williams, *An Actor's Story*, p. 29.

(19) *Club World*, 9 March, 18 May 1895, 15 Aug. 1896, 2 July 1898; Ashplant, 'CIU and ILP', pp. 465–6.

(20) *Club World*, 23 Feb., 6 July 1895, 18 April 1896; *Club Life*, 21 Oct. 1899; Ashplant, 'London Working Men's Clubs', p. 244, pp. 249–50; Davis, *op. cit.*, p. 109; Marlow, *op. cit.*, pp. 635–9; Taylor, *op. cit.*, pp. 68–9.

(21) *Club World*, 23 Feb.1895, 18 April 1896, 27 Nov. 1897; *Club Life*, 3 June 1899.

(22) *Club World*, 27 July, 24 Aug. 1895, 4 Jan., 8, 15 Feb., 11 April, 6 June 1896, 6 March, 17 April, 20 Nov. 1897; *Club Life*, 7 Jan. 1899.

(23) *Club World*, 11 May 1895, 10 Oct. 1896, 15 Jan. 1898.

(24) *Club World*, 15 Jan., 19 Feb. 1898.

(25) *Club World*, 14 Dec. 1895, 3, 31 Oct. 1896; Minute Book of the Committee, Mildmay Club, 17 May 1898.

(26) *Club World*, 5 Sept. 1896.

(27) *Club World*, 3 Nov. 1894; 1 Feb. 1896; 27 Aug. 1897.

(28) *Club World*, 26 Oct. 1895, 23 May, 28 Nov. 1896; Minute Book of the Committee, Mildmay Club, 17, 31 May, 5 July 1898.

むすび：クラブの人間関係

1890年代のマイルドメイ、あるいは広くクラブはそこに集まる労働者にとってどのような場だったのか、クラブメンがとり結ぶ人間関係はいかなるものだったのか、本稿でとりあげた論点に絡ませながら、簡単に整理しておきたい。

マイルドメイを含め、1890年代のクラブの多くはクラブメンが何よりも娯楽的な経験を期待する場であった。そして、曲がりなりにも学校教育を受けた経験を持つ、クラブにまで来て「レヴェルの低い、つまらない」レクチャーに出席しようなどとは考えない者たちが、クラブメンのうちでは多くなっていたと思われる。かつてクラブで幅をきかせていたのは、ある種の「職人的教養」は持っているものの、オフィシャルな意味での教育とはおよそ縁のないタイプの労働者だった。そして、クラブと特定の職種、場合によっては特定の職場のつながりも強かった。[1] クラブはいわば「仲間内でくつろげる場」だったのであり、彼らは外には排他的とも映るような集団を形成していた。こうしたクラブに集まる者たちにとっては、クラブにおけるクラスやレクチャーといった教育的企画は、オルタナティヴの欠如ゆえに、重要な意味を持ちえた。ところが、いわゆる「ノースクリフ革命」の時代(『デイリ・メイル』創刊は1896年)が到来すると、労働者たちは新聞を片手にクラブへ出かけ、「古くさい」レクチャー等には冷ややかな目を向けるようになっていく。同時に、クラブと職種や職場とのつながりも弱まり、クラブには雑多な背景の労働者が集まってくる。クラブは、例えば「チャーティズム時代の思い出話」を自慢げに語るような「たたき上げ職人」には、いささか居心地の悪い場と化していたのである。今や、クラブでは、「学のある」、それでいて「問題意識薄弱」な「若い者」が、職種を越えて(職種による偏在が完全になくなったとは思えないが)ヴァラエティやスポーツを楽しんでいた。

かつてのクラブでは、「共有される労働経験」がクラブメンを結びつけていた。雑多な労働者がクラブに加わってくる時代には、労働に代わるべき「共有経験」が求められることになったはずだが、こうした機会となったのがクラブのイヴェント、特に娯楽的なそれだったと思われる。ともに合唱を楽しみ、同じ芝居に歓声をあげ、スポーツ・カーニヴァルでしのぎを削ること、あるいは、ともに食事会を準備し、同じ道のりをサイクリングし、フラワー・ショウへの出品物で競い合うことが、クラブメンの一体感を支えていた。こうしたイヴェントの中で形成される人間関係には、おそらく、レクチャーやクラスといった機会につくられがちなどこか権威主義的な上下関係(「経験あるヴェテランの教師」と「ありがたく教えに従う生徒」)が入り込みにくかった。スポーツをはじめとするコンペティションがクラブメンの間に優劣の関係を持ち込み、人間関係をぎすぎすさせる危険性を抱

えていたことは否定できない。しかし、コンペティションの前提は参加者の平等であり、この点で「教師」と「生徒」の違いから出発するレクチャー等とは決定的に性格を異にする。しかも、クラブ・ライフの中のコンペティションは多くの場合「強いられた競争」ではなく、権威主義的な上下関係をもたらす以上に、「はりあう」「切磋琢磨する」といった気分の共有を通じてクラブメンに一体感を与える意味を持っていたと思われる。クラブと職種や職場のつながりが弱くなったという事情も、クラブにおける人間関係を考えるうえできわめて重要である。クラブメンの多くが同一の職場で働いているとすれば、当然にも、労働過程における関係がクラブでのつきあいにも持ち込まれてくるだろう。雑多なメンバーから成るクラブでは、クラブ内の人間関係は労働現場のそれからひとまず切り離されている。勿論、こうした場合でも、例えば、クラブの役員と新入りメンバーとが平等でいられることはないだろうが、少なくとも、職場での主従関係と連動して2人の関係が権威主義的な雰囲気を強く帯びる、といった事態は、雑多な性格のクラブでは回避されることになる。[2)]

クラブを包む雰囲気が良くも悪くもイージ・ゴーイングだったことは、クラブへのアルコールの浸透からも推測できる。1860年代以来の様々な論争や紆余曲折を経て、1890年代には、アルコールはクラブ・ライフの当然のアイテムとして定着していた。すでに具体例を示したように、レクチャーの場面にまでビールの売り子が入り込んでくるくらい、アルコールはクラブにおける人間関係のきわめて重要な媒介物になっていた。禁酒原則の撤回は、多くのクラブにおいてメンバーの飛躍的増大に結びついた。そして、アルコール解禁後にクラブにやってきた者たちは、「禁酒時代」のクラブメンに比べて、明らかに娯楽志向がより強かった。このような意味で、アルコールをめぐる方針の転換は、クラブが娯楽を中心とする場へと移行していくプロセスを促す効果を持ったといえよう。

娯楽イヴェントを共有することがクラブメンを結びつけたとはいうものの、レクチャー等に冷淡な姿勢を見せる「学のある」「若い者」は、クラブが提供する娯楽を無邪気に受け入れていたわけではなかった。彼らはマンネリ化したイヴェントにはクリティカルな目を向け、内容の充実を要求した。こうした態度の背景には、いわゆる「レジャーの大衆化」の時代にあって、労働者たちもある種の「見る目」を養っていたという事情があるだろう。勿論、労働者の「趣味の良さ」を過大評価はできないし、特に「上から」見れば、彼らの嗜好は「俗悪」そのものだったわけだが、それでも、クラブメンの多くが「レヴェルの低い、くだらない娯楽」では納得しないようになっていたことは察知できる。1895年12月、ガストンは、「かつて行なわれていたくだらない時間のつぶし方」はもはやクラブで人気を集めることはない、と述べている。[3)] クラブの大規模化やクラブメンの顔ぶれの変化も、こうした状況と関連していた。例えば、かつてのクラブで頻繁に披露されていた「素人芸」にとって、メンバーの誰かを揶揄するような「楽屋落ち」のネタは重要な要素だったと思われるが、「楽屋落ち」が観客に喜ばれるためには、彼らの多くが相互に知り合いであり、各々の事情を把握し合っていることが必要だったはずである。つまり、職種や職場を同じくするような者が集まる場としてのクラブが、「素人芸」の基盤だったのである。クラブメンの構成が大きく変容し、雑多な者た

ちが、しかも顔見知りになるのも難しいくらい大量にクラブにやってくるようになると、「楽屋落ち」をやっても反応を得られないという状況が生まれてくる。「楽屋落ち」を奪われてしまった「素人芸」は、「見る目」のある新顔のクラブメンからは相手にされなくなっていく。前述したように、「素人芸」はクラブから駆逐されはしないが、プロの芸人への依存が強まっていくことは、クラブメンの構成や「見る目」の変化から考えても、不可避といいうるようなプロセスであった。

クラブの娯楽イヴェントは、「シリアス」なインプリケイションと完全に切り離されてはいなかった。目の前で実験をやってくれるレクチャー、協同組合を訪ねる「お出かけ」、あるいは機械工支援のためのヴァラエティは、いずれも単なる娯楽としては片づけられない。娯楽中心の場になっていたクラブにも、それなりの「シリアス」なコミットメントの方法があったのである。クラブメンの多数派になりつつある「若い者」にとって、かつてのクラブメンのように、最悪の場合はフィジカルな衝突に至ることをも覚悟してハイド・パークで警官隊と対峙することには抵抗が強かったかもしれないが、ロンドン・カウンティ・カウンシルの選挙にあたって知人に投票を依頼するくらいのことなら、さして難しくなかったのではあるまいか？　クラブにおいて政治的・社会的な問題について語り、何らかの行動を起こすことは、1890年代になっても、珍しくなかった。ただし、語り方、行動のあり方は、従来のそれとは違っていた。

本稿で見てきたように、クラブの活動は、比較的安定したスケジュールの基礎の上で展開されていた。そして、スケジュールに組み込まれたイヴェントは、随分前から計画され、準備がすすめられるのが通例であった。クラブメンにとって、例えば翌月にどのようなイヴェントが用意されているか、あるいは年末年始には何が行なわれるか、をかなり正確に把握しておくことは、決して難しくなかった。彼らは、こうしてあらかじめ提示されたイヴェントのメニューの中から、自分が参加すべきものをこれまた事前に取捨選択していたと思われる。特に目的もなくふらっとクラブに立ち寄ることも勿論あっただろう。それでも、クラブのイヴェント・スケジュールの安定、そして計画されたスケジュールが着実に遂行されていく様子から得られる印象は、クラブ・ライフを貫いていていたのは、「気まぐれさ」よりもむしろ計画性だったのではなかろうか、というものである。こうした計画性は、コマーシャルなクラブ運営が要請するものでもあっただろう。

マイルドメイをはじめ、人気の獲得に成功したクラブは、1890年代には4桁のメンバーを抱えるほどに大規模化する。[4] こうした規模の拡大がクラブという場の重大な変容をもたらしたことは、まず間違いないだろう。「顔と名前も一致しない」クラブで、孤独感を覚えるメンバーもあったはずである。おそらく、劇団やクラブ・バンド、サイクリング・クラブのようなクラブ内集団(サブ・クラブ)の成長には、かつての小規模なクラブが持っていた雰囲気を再建しようという試みとしての意味があった。ロンドンのセントラル・クラブの書記であったジョージ・ナッシュは、1899年、「サブ・クラブが我々のクラブのバックボーンである」と語っている。数十人規模のつながりを形成しようという動きが、クラブの大規模化に対応して展開されていたのである。[5] クラブの運営を積極的に担う少数者といわば「お客様」となってクラブにやってくる多数者へのクラブメンの二極分

解がはっきりと示すように、クラブに自分の居場所としての強い帰属意識を持ち、自分の力でそれを支えようとする者が決して多くなかったことは否定できない。それでも、同時にクラブがある種の一体感を保持していたことも見逃せない。子ども向けディナーを支援しようと大勢のクラブ関係者が手を差し伸べたり、あるいは本稿では扱えなかったが、クラブ・ハウスの拡充やデコレイションの際にクラブメンが「労働奉仕」をはじめとする様々な「無償奉仕」をしたり、といった場面からは、「1人1人の力でクラブをつくっていく」一体感を看取できる。[6] また、前述したように、クラブ・ライフのいろいろな局面に導入されていたコンペティションが、「はりあう」「切磋琢磨する」気分を浸透させ、クラブに一体感を確保するうえで重要な役割を果たしていた。そして、こうして生き残っていた一体感がクラブの魅力の1つだったのではなかろうか？　これは、例えばミュージック・ホール等では経験できないものだったはずである。クラブにおけるトラブルが頻発し、何らかの取り締まりが必要になってくるという事態は、クラブの一体感に対する深刻な脅威だったと思われる。[7]

マイルドメイが抱え込んだ混雑の問題は、少なくともロンドンに関する限り、自分が属するそれ以外のクラブに出かけていくことが、クラブメンにとってごく日常的な行為だったことを示唆している。アソウシエイト・カードさえ持っていれば、自分のクラブのイヴェントに不満がある場合には、おもしろそうなクラブへ足を運ぶことができた。この意味で、クラブの「敷居」は高いものではなかった。マイルドメイのイヴェントに参加することは、マイルドメイに属さない者たちにとって、特別の決意を要するような行動ではなかった。おそらく、マイルドメイに行けば、マイルドメイやその他のクラブに属している知人を見つけることが可能だったのである。

こうなると、特定のクラブに所属することにどれほどの意味があったか、という疑問が浮上してくるかもしれない。マイルドメイのメンバーとしてマイルドメイのイヴェントに参加することと、近隣のシェイクスピア・クラブに所属しながらマイルドメイのイヴェントに出かけていくこと、両者が全く同じだったとまでは言わなくても、他クラブから大勢が押しかけるためにマイルドメイのメンバーが自分のクラブの人気イヴェントに入れない、などという事態があったことを考えると（これは当該クラブのメンバーだから優先的に入場できるわけではないことを示しているだろう）、どこのクラブのメンバーシップ・カードを持っているか、よりも、アソウシエイト・カードを持っているか否か、の方がよほど重要だったのではないか、という疑問が出てきても当然だろう。とはいえ、仮にメンバー相互のつながりが相対的に希薄な場合であっても、同じクラブのメンバーシップ・カードを保有していることがかもしだすある種の仲間意識は軽視すべきでない。「仲間」と「よその人」という明確な区別をつくりだすメンバーシップの「線」は、たとえ実態の裏づけをほとんど欠いているとしても、人間関係を拘束する力を持っていたと思われる。また、そもそも、所属クラブを口にすることは、労働者が自己をアイデンティファイする際の重要項目だったのだろうか？　例えば、どこのエリート・クラブに属しているかが当該のジェントルマンの人となりについて多くの情報を伝えたのと同じように、労働者クラブの「名門」に所属していることは、労働者に何らかのプ

レスティージを与えたのだろうか？　この問題は、クラブメンの帰属意識の問題とも明らかに関連している。機会を改めて検討する価値のある論点であろう。

マイルドメイの「敷居」は、アソウシエイト・カードを持つ者にとってだけでなく、おそらく、クラブメン以外の者にとってもさして高くはなかった。こうした事情は、ミュージック・ホールとの間に人材交流があったことや、フラワー・ショウやガーデン・パーティ、食事会といった公開イヴェントが人気を博したことから推測できる。クラブは「閉ざされた場」だったのではなく、ミュージック・ホール等を構成要素とするより大きな「大衆娯楽の世界」の一部分として位置づいていたし、地域社会に根づいたインスティテューションでもあった。クラブのステージで芸を披露する者にとっても、フラワー・ショウを見物する者にとっても、マイルドメイは排他的な集団というイメージで存在してはいなかった。

クラブという場、そしてそこで展開される人間関係の変容をシンボライズするのが、有料入場制の導入だろう。クラブの運営は、「メンバー」から徴収される会費よりも「オーディエンス」が入場のたびに支払う入場料に依存するようになっていた。クラブが何よりアピールすべき対象は、クラブを担い運営することに関心を抱くような「メンバー」ではなく、可能な限り多くの「オーディエンス」だった。「オーディエンス」は必ずしも「メンバー」である必要はなかったわけだが、逆に、「メンバー」にしても、ほとんどの場面では「オーディエンス」でありさえすればよかった。クラブの運営その他に積極的に関与する「メンバー」はほんの少数だった。[8] また、自分のクラブだというのに(会費を払っているのに)入場に金がかかるというシステムが一般化すれば、帰属意識がいよいよ弱まっても不思議なことではない。自分の所属するクラブの近くを通りかかって、ふと気が向いたので芝居を覗いてみようと思っても、金がなければ入ることができない。クラブの「敷居」は、この側面では高くなっていたのである。いささかキャッチフレイズめくが、「メンバー」の「オーディエンス」化こそが、1890年代のクラブ・ライフを以前のそれと比較して最もわかりやすく特徴づけることばであるように思われる。

註

(1) ロンドン仕立工クラブ・アンド・インスティテュート、椅子張り職人クラブといった、はっきりと職種をベースにしたクラブは少なくなかった。*Workmen's Club Journal*, 19 June 1875; *Club Life*, 12 Aug. 1899.

(2) 1960年代のハダズフィールドを対象としたブライアン・ジャクスンの労働者コミュニティ研究は、クラブの人間関係を以下のように叙述している。「指導者の役割を果たすことと社会的な平等は両立していた。メンバーたちは役員が持つ権利を尊重してはいたが、人間としての役員に権威など全く認めてはいなかった。それゆえ、実際に尋ねてみないと、混雑したクラブ・ルームの中で誰が書記であるか捜し出すのは容易ではなかった。」時代も地域も全く異なるので単純な類推ができないことは言うまでもないが、こうした人間関係のあり方がクラブ・ライフの1つの特徴だったことを示唆しているように思われる。Jackson, *op. cit.* p. 59.

(3) *Club World*, 28 Dec. 1895.

(4) ちなみに、1863−64年の時期のCIU加盟クラブの平均メンバーシップは232。Hall, *Our Sixty Years*, p. 25.

(5) *Club Life,* 15 April 1899; Ashplant, 'London Working Men's Clubs', pp. 262–4; Marlow, *op. cit.,* p. 677.

(6) マイルドメイの新クラブ・ハウス建設の際には、次のようなアピールが発せられた。「図書室を整備するために手を貸してくれる木工労働者1人か2人、ポリティカル・アンド・エデュケイショナル・カウンシルに一報してもらえないだろうか。労働によって手助けできない者は、図書室に備えるための本を、提供するなり、乞い求めてくるなり、あるいは別のやり方で手にいれるなりしてほしい。」*Club World,* 10 Nov. 1894, 19 Jan., 5 Feb. 1895.

(7) Marlow, *op. cit.,* pp. 679–80.

(8) Ashplant, 'London Working Men' s Clubs', p. 259.

（こせき　たかし　東京農工大学農学部助教授）

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 37*

発行所　東京都国立市中2－1
一橋大学社会科学古典資料センター

発行日　1996年10月31日

印刷所　東京都八王子市石川町2951－9
三省堂印刷株式会社